

一、翁との邂逅

井角建(いすみたける)が経営する有限会社「彌栄(やさか)広告」の営業は、近年順調ではなかった。

創業して二十年、主要得意先のレストランチェーン本部会社のお陰で、これまでは順調に推移してきたが、数年前から広告取扱高が漸減しはじめていた。それは、チェーン店の売り上げが低迷して、本部会社は店舗を統合縮小する方針を打ち出し、販売促進費を削減しはじめたからだ。相応して井角の広告代理店の扱い高は大幅に減少していた。それだけでなく個人経営の広告代理店は、早晚経営が成り立たなくなるだろうと考えていた矢先だった。何とか単発の小口の広告も取って凌いできたが、このままでは廃業は避けられないような情勢だった。それで、一般の宣伝広告だけに限定せず、間口を広げて「繁盛経営のお手伝い」と銘打って、販売促進につながることであったら何でもしようとして個人経営の会社や商店にまで取引の範囲を広げていた。正に「何でも屋」である。

そのうち井角は、通信販売業界の好業績に注目し、いっそ通販会社に転向しようかと、広告代理業を続けながら模索した。

調べてみると大手の通販業者は、間口を広げられるだけ広げて、これでもかと言うほど商品を満載した大部のカタログ本を発行し、それを大量に頒布しているのだった。

一方、自社開発商品を単品で販売している業者もあった。

小資本で通販を展開する場合は、一般の販売ルートでは売っていない商品に特化し、販売対象を絞った売り方が良さそうだった。現在通販業

界で大手となつている業者も、初めは間借りの二階でパンティーやハンカチなどの女性の衣料品から出発して、徐々に商品を増やして有名になった大手もあった。やはり通販は女性向けの商品からスタートするのが無難ようである。

井角も通販業界に参入するに当たって、まず始めは女性の下着から始めようかと思つた。だが下着の知識がないし、それに、やはり女性の下着を扱うことには抵抗があつた。

いろいろ考えた末、宗教関連グッズからしようと思つた。宗教関連グッズといつても多様な物が考えられた。まず、西洋ものか東洋ものかの区別がある。もともと宗教的なものに引かれていたので、この方面の商品を扱うことには抵抗はない。

日本の宗教の代表は仏教である。一方、西洋の代表宗教は言うまでもなくキリスト教だ。しかし日本では圧倒的に仏教の信者が多い。そこで考えたのは、密教のシンボル、曼荼羅(まんだら)をモチーフにしたものだった。これをデザイン化して、ペンダントなどの装飾品に用いてみようと思つたのだ。

曼荼羅は、密教における宇宙観を顕わしている。その基本形は「方形」と「円形」だと井角は解釈した。一般的な曼荼羅には多数の「仏」が描かれている。また仏を表わす種字を全面に描いた種字曼荼羅というものもある。種字というのはその仏を表わす梵字のことだ

(そうだ、円形と方形を台座にして梵字をあしらつた意匠にしよう) 井角は基本コンセプトを決めると、資料を集め、デザイン事務所をしている埴生佳与(はにうかよ)に依頼した。彼女とは付き合いが長く、もう二十年にもなる。

佳与に相談して、生まれ年にちなんだ仏の種字を基に、それぞれの梵字ペンダントを造ることにした。アイデアを練り、デザインを決定した。そして先ず版下を起こす。

ある程度の販売を見越しているのです、一つ一つを一から仕上げているのではおぼつかないし、コストもかかり、販売価格にも支障がある。

井角は金属加工をしている町工場に行き、版下原図をもとに、まず形削盤で精密に真鍮の厚板を削りだして原型を作製してもらった。それから雌形を取って、それに銀を溶融して流し込む成型法を採る。最終仕上げは手仕事で行う。

さまざまに試行錯誤した末、納得のいく製品をつくり売り出した。商品撮影をし、DM用のリーフレットを作った。

次には占いが好きだと思える若い女性たちの名簿を作った。DMで物販を成功させるには、名簿が成否を分けるといつてもよい。

名簿をもとに数千通のDMを発送したが皆目売れなかった。

それではと、西洋の占星術にヒントを得て十二星座のペンダントも作って商品を増やし、今度は新聞折り込みチラシで不特定多数に宛てて宣伝したがこれも反響がほとんどなかった。

様々に手を変え宣伝広告をしたが皆目売れなかった。自分は広告屋として自信を持っていて、自分が乗り出せば通販ぐらいは充分できると思っていたのに、井角が考えていた理論と実践は違った。

井角は、商品が売れない原因を考えた。

売れないのは：商品に興味がない／魅力がない／値打ちがない／この三つが理由だろうと思った。ないないづくしでは売れるはずがないとも思う。とは言っても、販売価格を安く設定する訳にもいかない。

その内、ペンダントよりも材料に使う銀に興味が向いた。金・銀・プラチナ等、貴金属は毎日相場が動く。

結果的に貴金属の売買に手を出し、かなり損をしてしまった。それだけではなかった。自分の宣伝広告の手腕を過信して、大量に販売できる見込みで、ペンダントなどの銀製品を、相当数在庫を抱えてしまっていた。

た。

このような時、あがけばあがく程、損の上積みになると自戒した。

そのうち、貴金属の売買については少しずつ分かって来た。それは、必ず現物を買うこと。頻繁に売買しないこと。じっくり値が上がるのを半年でも一年でも焦らずに待つこと。等々を経験と調査で覚えた。これで貴金属の売買で被った損は全部取り返した。また、ペンダントなどの貴金属製品の在庫分は、長姉の紹介で某占いチェーン店のカリスマ社長が全てを買い上げてくれた。

井角はこれで一息つくことが出来、広告業に専念しようと思った。

しかし、本業の広告代理店は、主要得意先のレストランチェーン会社の扱い高がさらに減少していた。それは、チェーン本部が配下の不採算店を次々と撤収していたからである。それでもチェーン会社の経営は立ち直らず、井角が親しかった本部の会長が現役から退いた。そして経営2権を娘に譲った。

その頃から井角の経営する彌栄広告への発注が目立って減り、売り上げが半減した。

主要得意先からの注文が減ると、大部分の売り上げをそこに依存していた井角の会社はたちまち経営が行き詰まってきた。

井角の本業とする広告代理業は、以前から大手の寡占状態になっていた中小では経営は苦しくなってきた。まして、井角が経営しているような零細な広告屋は、これから先の希望がないように思えた。

(一日も早く商売替えをしよう)と井角はあがいた。

扱い商品を広げ、健康食品の通販も手がけてみたが、業績は思うようには伸びなかった。

その頃会社には自分の配下に七人の従業員がいたが、たちまちこの社員たちを維持できないような状況になってきた。

井角は通販業への転向も諦めざるを得ないと思い、従業員を集めて自分が退くことを発表した。広告代理店の方は、レストランチェーンの他にも得意先はあったので、営業部長の肩書きを付けていた男子社員に会社の後を譲り自分が身を引いた。

後継者は更に社員を半数くらいに減らせば何とかやっていけるはずだった。

身を引いた井角は以前より自分が本当にやりたいと思っていた仕事でやりなおそうと思った。

自分は、実は宗教者になりたかったのである。でもこのようなことは自分の家族にも世間様にも話せない。心情を打ち明けて話せるのは長姉の和枝だけだった。

ある日、仕事を辞めたことを妹から聞いたと言って長姉の和枝から電話があった。井角は姉が二人、妹が一人いた。

「知っている先生が大変な霊能者で、どんなことでも即座に分かるんですよ。この世での人生は前世の影響を受けてるんやて……」

長姉は、そのような話をして、こんどその先生に会う用事があるから一緒に行ってみようと井角を誘った。

井角は姉の話に興味を覚えて一緒に行ってみることにした。

出会ってみると、見覚えのある人だった。丹波の出雲大神宮へ参詣した折、何かと親切に教えてくれた社家の翁だと思ったのだ。

改めて井角が「井角建(いすみたけ)です」と名乗り、その節はお世話になりありがとうございますと言っていると、相手は山辺光雲と名乗り、怪訝な顔をしている。井角はそつと顔を窺った。

失礼ですが…、と井角は聞いた。

「前にお会いしたことがあると思うのですが…」

「いや、今日がはじめてだと思いますよ。会ったのは何処でしたか？」と

光雲が聞き、丹波の出雲神社でお会いしたような記憶があると井角が言う、

「それで分かりました。それは私の兄です」と相手は言い、兄も私も丹波生まれで、兄は社家を継ぎ、自分は家を出て薬学を学んだのだが病気になる、ある時から神様の声が聞こえるようになった。それで皆さんが何かと相談来るので、それが自分の役割と心得て様々な助言をするようになった。その時から山辺光雲と名乗っているというような説明をした。

同行した姉は「先生、これは私の弟です。よろしくお願いいたします」と言い、なぜ此処へ連れてきたのか簡単に話した。光雲は、井角の顔を見つめなおすと、手元の紙片に目を移した。その紙片は、面談前に井角が氏名と年齢だけを書いて出したものである。

視線が自分に戻るのを待って、井角は山辺光雲に聞いてみた。

「モノ書きで食べて行けないでしょうか？」

「あなたの前世は、先の二回とも神主だった。もともと霊能者なのでモノ書きくらいはできますよ」

光雲師はこともなげに答えた。

「でも本当のところは、私のようなことをしたいのでしょうか」

それで人助けをしたいと思っただけと決めつけられた。

その通りだった。ずばり見抜かれていた。

「あなたの先祖は、アメノウズメが生んだ七番目の娘、ナノヒメの子スクナヒコです。その後あなたは何度も生まれ変わりました。今のあなたの妻が前世は男で、密教の行者の頭だった頃、今とは逆にその妻だった時もありました。今のあなたは男になって三代目です。その一代前は杵築、今の出雲です。そこにいて神官でした。二代前は尾張津島で、この時も神官でした。その以前はたいい女でした」

生まれ変われば、凡そこの世で百年、あの世で百年過ぎますが、すぐに生まれ変われない場合もあり、人によって違いがある。何年で何代

とは言えない。あなたの場合は今生は八回目だと光雲師は言うのだった。
「あなたは江戸時代の尾州津島にいて神官だった頃、大部の書物を書き上げました。日本神学論とでもいうような内容の本です。他に絵も描いています」

さらに光雲師は話を続ける。

「その後生まれ変わって杵築にいる頃も神官をしていました。今の出雲大社です。そこではヘルンという外人さんの正殿参拝に付き添いました。また、名草神社への参拝にもヘルンさんに同行して案内に立ちました。今は八重垣神社と呼んでいる社のことです。」

その時ヘルンさんは男盛りの四十歳代、あなたはその倍にもなるうかという老境にありましたが、杖をつき草鞋(わらじ)をはいて名草の地を案内しました。それでも慣れない草鞋を履いたヘルンさんよりは、しっかりとした足取りで歩いていましたよ、というのだった。

それはそうとして、と光雲師は話し続ける。

「あなたには役割があると神がいわれます」

光雲師は、井角の顔をじっと見つめて確かめるように言った。

私は、あなたが会いに来るのを待っていました。あなたの守護神アマテラスは、あなたの役割をもう決めていました。そして大きな期待を寄せている。あなたは、ある女性と共に、大和心を取り戻す活動をはじめます。とあると言うのだった。

「アマテラスさんからあなたに伝えることがあります」

光雲師はあらためてきりだした。今アマテラスさんがこの場にいられている。古代ヤマトで、あなたが前世に歌っていた歌を、今代わりに歌って伝えてほしいと言っておられるというのである。

何百とある歌の中から選ぶので、思いついたヤマトにゆかりの言葉をひとつ選べと言うのだった。

「ヤマトはやはりサクラですね」井角はすかさず答えた。

光雲師は一呼吸すると、やおら琴の音のような声を出し始めた。

「タン・ツンツンツン・ツンツンツンツン・ツンツン……」

前奏のようだった。

「ヤヤヤオー、ヤヤヤオー、ヤヤヤ・オオオ」

脳天から発声しているような翁の声だった。

♪大和は神の 大和は神の 大和は神のつくりし国なれば 大和
やよし 大和や春 ヤマトや桜 ヤマトは今春のさかり ヤマタイの国

……♪

聞き覚えのある歌だった。

光雲師は朗々と声量たつぷりに謡いはじめた。井角ははつきりと思いつ出した。不思議にもその歌は、井角が佳与と十津川へ旅行した時、スナ4
ックで初老の女が唄った歌と全く同じ歌だったのだ。

歌い終わると、

「この歌はあなたがサンカの酋長の息子だった時に歌ったものだよ

と言い、古代ヤマトの成り立ちの話をした。

その話のあらまは、……………

遠い昔、今の太平洋の中央にあった大陸ムウがある事件で海洋に

沈んだ。その時選ばれた数百人の人達がアマテラスをリーダーにして、巨大な丸木をくり抜いた舟で脱出。舟は北に向かって何年も航海を続けた。アマテラスは舟の中で一番目の娘、アメノウズメを産んだ。そして様々な困難を経てやっと温暖な美しい列島に上陸した。そこが現代に続く日本である。大和の国はアマテラスによって作られたのだというような話だった。話し終わると、

「今日からあなたの守護神はアマテラスになります」と言った。
そして大判の短冊にその場で【天照皇大神】と墨書した。

少し離して見てから納得したように頷くと、次は朱肉を指先に付けて短冊の右肩に朱印を三つ縦に並べた。また下には同様に指先で桜花の文様をしるした。

「あなた、ええもんもろうたナ。アマテラスさんが期待してはるんや」
光雲師は、そのような言い方をした。そして話を続ける。

「大和の国作りはエミシの協力で進められた。エミシというのは先住民族でもあるのだけれど、アマテラスさんは彼等の協力で、広大な湖や湿地だった大和平野を干拓した。それは、暗渠排水でこの湖の水を抜いて都にしたんだよ」

つまり、地下水路で後にいう大和川に排水したのだという。

帰り際、光雲師は井角に、今の歌は古代大和で君がエミシ酋長の息子だった頃謡った歌なので、すぐ歌えるようになるはずだ。歌えたら録音して又ここへ持って来てくるようにと言ったのだった。

二、山辺光雲に師事

井角建（いすみたける）は、山辺光雲の弟子になりたいと思った。

次に光雲師に会う機会があれば弟子入りを志願してみようと思う。やはり自分は宗教者になりたい。この思いは長い間続いていた。このようなことは、誰にでも相談できるようなことではなかった。もし、話せるとしたら古くから付き合いのある殖生佳与（はにかよ）だけだった。

佳与は、井角と同じ広告代理店に勤めていたが、しばらくして独立し、

現在も仲間とデザイン工房をしている。当時から佳与との付き合いは続いていた。

佳与に話すと、満更興味は無いという風ではなかった。
「なんだか前に、出雲大神宮で出会ったお爺さんから聞いたような話しになってきそうやね」

「不思議なんやけどね、相手はその弟さんやったんや」

井角は、姉に紹介されて会った相手は、実は丹波の出雲大神宮で出逢った社家の弟だったのだと話した。そして、自分はその人の弟子になって宗教者を目指したいとも言った。

「押しかけ女房ではなしに、押しかけ弟子にでもなればどう？」

佳与はそんなふう言う。

井角は、姉には話さず一人で高槻の駅近くにある事務所に、また光雲師を訪ねていった。この北側の山地を越えたところが、出雲大神宮のある亀岡だった。

その日は何人もの先客があった。ほとんどが女性だった。時々集まって翁の話を聞いているらしい。その日は一人の女性が歌の指導を受けていた。すらりとした三十代の美しい人だった。カラオケもマイクも何も無い。歌声は良く通る美しいソプラノだった。

古い大和の歌なのだという。その人は、やさしい日本語で静かに語るように謡った。

「井角さん、あなたにも歌が出ましたね」

光雲師は、女性が謡い終わると私の方に振り向いて言った。

「あのアマテラスさんの歌、すぐに歌えたでしょう。録音できましたか？」

「はい。録音しました。今持って来ています」

井角は、先生これですと差し出した。

「歌えましたか。今歌えますか」

師はテープを聴こうともせず、受け取ると机の上に置いた。

井角は、はい、歌えますと一歩前に出て、体勢をとった。

前奏の大和琴のような声は省いた。

♪奈良の都に春がくるよ 桜の春がくるよ

大和は神の 大和は神の

大和は神のつくりし国なれば

大和やよし 大和や春 大和や桜

大和は今春のさかり ヤマタイの国♪：

井角は前部分だけを歌ってみせた。

「上手(うま)い！」 光雲師は大声で言った。そこにいる人全員が拍手した。

「ほんま、うまいなあ！ これ歌える者はおらんわ」

光雲師は目を細めて拍手をしている。

「この歌は、この人が前世に吉野に住んでいて、エミシの酋長の息子だった時に歌ったものやけど、さすがに本物や。上手いもんや」

この人がヤマトの国つくり handsを貸したんやと、光雲師は廻りで聞いている人たちに説明をした。

「この人は、このはるか後の時代に出雲に居てネコの歌も歌った。こんな歌や」

今度は光雲師が歌いはじめた。

♪出雲にネコがいたそうな

にゃんにゃんのん にゃんにゃんのん

♪神さまが可愛くてネコネコネコと呼ぶ

にゃんにゃんのん にゃんにゃんのん

ネコは喜んで 神さまにー よい踊りを見せよと踊る

にゃんにゃんのん にゃんにゃんのん

神さま手たたいて ほめてほーめて おだてておだて

にゃんにゃんのん にゃんにゃんのん

神さま一緒に踊り出す

にゃんにゃんにゃんにゃんにゃんにゃん

にゃんにゃんにゃんにゃんのん にゃんにゃんのん♪

「ネコというのは、可愛い子という意味で、神さまが名付けたのだけれど、今これが童謡になっている。出雲の観光協会へ行って歌ってごらん、皆びつくりするよ」

少し歌った後で光雲師はそう言った。そしてまた、この歌は君が昔に謡った歌だ。今私が君の過去世から引つ張り出したものである。今謡つたのは振り出しの部分だけで、実はまだまだ続く長い歌だ。元々君の歌なので続きは歌えるはずとも言った。

そのあと、この高槻で光雲師に集会所を提供している社長が、「先生と一緒に食事に行こう」と皆を誘ってくれ、昼食を共にした。この会に集まる人達は山辺光雲を先生と呼んでいる。

何度かその高槻での集まりに行った。自分が経営する家具販売会社の事務所を、光雲師が主催する集会所に提供しているこの社長は、この会の世話役であり、山辺光雲のファンで「ひかりの会」の番頭格でもあった。

ある日の集まりの後、井角は先生と番頭だけになったとき、いきなり切り出した。

「先生、私を弟子にしてもらえませんか？」

井角はじつと翁を見つめて返事を待った。

「そうなれば給料は出せませんが、それでやって行けますか？」
先生に代わって番頭が答えた。

「はい。一年ぐらいだったらやって行けます」

「少し短いなあ」先生に代わり、また番頭が答えた。

先生は黙ったままだった。

井角はじつと翁の表情を見つめていたが、翁の表情は動かなかった。
井角は弟子としての入門を拒絶されたと判断した。

(よし、一から自分一人で勉強をやり直そう) 井角は決心した。

その後も機会を見つけては、よく光雲師の元に顔を出した。

事情で集会所が変わってからも、その変更先までよく行った。食事を一緒にしたり、スナックなどにも飲みに行った。

師は興に乗ると、よく不思議な歌を謡った。何処からともなく音楽が聞こえ、自然と口を開き、声帯から声が出るのだという。

自分は勝手に山辺光雲を師と崇め師事した。

そのうち師は、霊能が開発されるという、古代ヤマトの歌を手ずから指導してくれた。

それから数年が過ぎた。

「君はすでにその力を得た。できるだけ早く活動をはじめなさい」

ある日師はそのように言った。

「すべてを任せます。まず奈良県内に集会所をつくりなさい」

師は、一日も早く活動を始めるように言った。

……ヤマトの歴史が狂っている。また、この国の医学、経済学、哲学など、あらゆる西欧由来の学問も間違っている。これを根本から改めてください。真理を追求するのが学問であったのに、現代の学問は違っている。学問ができ、権威や金に左右されて、ウソが本当としてまかり通る世の中になってしまった。君はまず日本の歴史から改める作業をはじめてほしい。それがあなたの今生に科せられた使命だというようなこ

とだった。

光雲師は、「あなたにこのことを伝えるのが私の役目なのだよ」とも言った。

翌年、師は「ひかりの神」の召命により天に召された。

井角は先ず五十日と百日の霊祭を済ませた。

「君にはその力が既にある。奈良県内なら何処でも良い。君がここだと思うところに、まず集会所をつくりなさい。その時になれば協力者が現れ、また必要なお金も自然と集まるよ」

師は生前そのように言っていたが井角はまったく自信がなかった。まだ霊感も霊能力もあるとは思っていなかったからである。

それに先立つ資金がまったく無かった。それで井角はまず修行をはじめようと思った。修行と言っても巖窟に籠もり座禅をしたのではなかった。ただ山中に入り真理を見つめようとしたのだった。

主な修行場は吉野三山だった。西吉野にあるこの三体の山は、山頂にそれぞれ由緒ある神社が鎮座していた。

高野山にも入った。また丹波の高熊山や伊勢の倉田山でも修行した。

昼は山林に入り、夜は主として神道を書物から学んだのである。命題は、物事の真理を追究しようとしたのだ。

「真理」とは何か？

真理とは、実在するものの肯定であり、実在しないものの否定である。つまり言葉での表現と実在の一致と言えるところだ。

では「実在」とは何か？

実在とは、形而上学的な恒常不変の実体・本体だと突き詰めて考えていった。

併せて東西の哲学書を片っ端から読んでいく。以前すでに読んでいた

のもあつたが、内容はほとんど覚えていなかった。それでもう一度読み直した。ところが読んだ後からすぐに忘れるのだった。自分は改めて記憶力が悪いことを知らしめられた。何とか記憶力を向上させられないか。

井角は、記憶力を増大させる秘術に「求聞持法」というのがあつたといふことを、おぼろげながら思いだした。調べてみると弘法大師空海もこの秘法を我がものして記憶力を増強したのだと言ふ。その秘法、正式には「虚空蔵菩薩求聞持法」といい、虚空蔵菩薩の真言（ナウボウ・アキヤシヤ・ギヤラバヤ・オンアリキヤ・マリボリ・ソワカ）と一日一万回、百日間休みなく唱え続けると成就でき、それが適うと記憶力が抜群に向ふ上なのだといふ。

井角は無謀にも求聞持法に挑戦した。

始めてみると、すぐに咽が涸れ、声が出なくなる。足腰が痛い、足が痙攣（けいれん）を起こす等々ですぐに挫折した。昔より、駆け出しの優婆塞から名だたる名僧まで、実に多くの修行者がこの求聞持法に挑戦したが、ことごとくが挫折した。成満した者はほとんどいない。無理をして続けても終いには発狂するのだといふ。そのような荒行なので、元々素人の井角が続けられる訳はなかつたのである。

仕方がないので座禅をして瞑想した。板敷きのある場所に座布団を二つ折りして、その上に腰を下ろし、半跏趺坐または結跏趺坐で座つて瞑想を続ける。時々半跏／結跏と足を組み替えて痺れを防いで続けるのだ。しかし、実のところは、この瞑想もすぐに続けられなくなった。というのは、足が痺れてくると瞑想どころではなくなる。先に言つた「真理を見つめる」というような思索などできたものではなかつた。

井角は形に拘らないことにした。胡座をかいて座つてよし、片膝を立てていてもよし、寝ころんでいてもよし、もちろん正座してでもよし、井角は自分が最も安楽にできる姿勢を取つて思索した。

様々なこの世の現象を考えると、最も根源の問題は「ある」と「ない」だろうと思つた。言葉を代えて言つと、「存在するのか、しないのか」といふことである。これを突き詰めて考えると、最も確かで疑いなく存在しているのは「こころ」だけではないだろうかと考えるに至つた。

また井角は真理を求めて様々な新興宗教の門をくぐつた。

天輪教、弁天会、成功の家、立証公正会、阿難宗、海王会、ダビデの証人、大倭教、高野山宗等々だつた。

井角の家は古くは真言宗だつたが、江戸時代の終り頃から浄土真宗本願寺派に宗派替えした。村の菩提寺が所属宗派を代えたからだつた。以来井角の家は代々門徒で、熱心な信者だつた両親のもと、「正信偈」の唱和を子守歌代わりにして育つたのだつた。井角は読経の声を聞くのが何となく好きだつた。

井角は、新興宗教各宗派が開く勉強会に参加したり、にわか信者になつたりして、教えを乞うため多くの門をくぐつたが、何処も井角にはしつくり来ない。同門の信者に聞いても、井角が必要とする答は得られなかつた。指導者クラスの人物に替わつても井角が満足できる応答はできない宗派もあつた。

そのうち井角が一番興味を持ったのは大倭（おほやまと）だつた。井角は大倭教の修行会に二度参加した。三泊四日だつたと思う。大倭教主、山口鬼三郎が修行したといふ高熊山にも登拝した。鬼三郎が初めて啓示を受けたといふ小旗神社にも参拝した。そしてこの神社の宮司が高名な歴史学者だとも知つた。いわゆる大倭教は、園部の貧農の主婦山口なほの神懸かりからはじまる。後に鬼三郎が、なほから懇請されて神業に参画してから教線が拡大したのださうである。

大倭には本部と呼ばれるところが豊岡と園部の二カ所にある。豊岡がそ

の教導本部で、園部が祭式本部とも言える機能を持つ。井角は、修行会に参加する前にもその両方に行ったことがあった。園部は教祖山口なほの生家があった土地である。

戦前に「皇道大倭」と称したこの教団は国家権力によって、二度にわたり大弾圧を受けた。罪名は主として「不敬罪」だった。山口なほ、鬼三郎はじめ幹部はほとんど捕らわれ、拷問を受け懲役刑とされた。

戦後は無実として全員が解放された。教団は壊滅的な打撃を受けたが、鬼三郎は国家に対して賠償を請求しなかった。その後徐々に教団は復興し、現代は「おほやまと」と名を改めて往時ほどではないが存続して活動を続けていたのだ。

修行期間中に井角は、園部の弥勒殿に入った。殿上正面に教祖山口なほ、教主鬼三郎の肖像写真が架かっていた。井角はその真下に正座してなほの顔を見上げた。最初に見上げた時の顔と異なり、教祖の顔がにこやかに笑ってみえたのだった。井角は教祖がにわかに親しく思えた。

修行会を終えると井角は改めて大倭教についてももう一度調べてみようと思った。井角がまだ二十代の頃『邪宗門』という高橋和巳の書いた小説が世間から興味を持たれたことがあった。これは大倭をモデルにした小説だと言われ、井角も買って読んでみたことがあったので大倭についてはある程度の知識があった。

教団内の売店に教団に關係する書籍が多く積まれていたので買い込んで帰った。それらの本を読んでもみると、大倭という教団は大変興味深いと思った。山口なほ・鬼三郎共に大変魅力があった。

井角は、吉野三山を中心に高野山や伊勢の倉田山、丹波の高熊山でも修行した。

山辺光雲は、まず、間違っている日本の歴史を正すように言っていた。

正史といわれる『日本書紀』『続日本紀』など、いわゆる六国史も正しい日本の歴史を記していないところが多くあるという。

井角は、前に光雲師から聞いていた話を基に物語風に日本史を綴ってみようと思った。「もう一つのヤマト物語」と題して日本史を綴りはじめた。(まずは世間様に認知されなければならない)と考えた井角は第一部の現代編を書き終わると、大手の出版社の新人賞に応募した。続いて第二部飛鳥編、第三部ヤマト編と日本史を遡って記述する計画を立てた。

予想されたことだったが、「新人賞」は一次選考すら通過しなかった。井角は懲りずに翌年の新人賞に向けて次の第二部を書き始める。書き上げると前作と同様に応募したが、二作目の作品もまったく音沙汰がなかった。

井角は考えた。このままではダメだ。多くの人達に読んでもらうには、「そうだネットしかない」と思った。井角は早速ホームページを立ち上げてネット上で物語を発表した。題して『もう一つのヤマト物語』とした。丹生族の末裔の男女をモデルにして、その転生の物語で日本の歴史を辿ってみようと考えた作品だった。

しかし、これも大した反響はなかった。

三、ひかりの会

やはり実際の活動をしなければダメだ、そう思った井角建(いすみたける)は具体的に活動をはじめようとした。

井角は初めから会の名を決めていた。「ひかりの会」というのが井角がつくる予定の団体名だった。師、山辺光雲が主催していた会名を継承

しようとしたのである。

会の目的を次のように決めた。

- 二十一世紀の中頃迄に奈良遷都を実現させる
- 奈良に「ひかりの国・ヤマト」をつくる
- 古き良き日本を取り戻して世界平和の礎とする

井角はひかりの会二代目会長を名乗った。

初代は勿論、師の山辺光雲である。

光雲師はいつも言っていた。

(日本の都は本来的にヤマトでなければならぬ) 大和国とは今の奈良県だが、ヤマトは日本列島全体の意味でもある。古代には秋津島とも言った。このヤマトの国と同様に「ひかりの会」は、奈良県に本部を置くべきだと思う。つまり、ひかりの会は奈良県内の、何れかの地から発足させたかった。

井角はその候補地を前から奈良県の五條市内にしようと決めていた。それは何故か。

それは、五條という地は古よりも由緒がある土地柄だったからである。五條市は、ほぼ昔の大和国宇智郡と地域が重なる。この宇智郡の中心地は須恵(すえ)という所である。この地名は陶器の須恵器に因む。つまり陶器製造の技術を持って渡来した陶工たちが集住した地域なのである。現在でも五條市須恵町という地名が残る。この須恵町には統神社といるのがあり、この統(すべ)は須恵(すえ)につながる地名だと謂われている。

この統神社のある辺りが古代宇智郡の中心地域だったようだ。すぐ近くには式内社の宇智神社もある。平安時代に成立した『日本霊異記』に、宇智郡(うちのこおり)に「内市(うちのいち)」という市が立っていたこと

が載せられているが、この内は宇智のことであることは言うまでもない。そのような由緒があり、また藤原南家の本貫の地でもあったようだ。藤原武智麿が建てた栄山寺もすぐ近くだ。それに奈良時代後期の政争でその犠牲となった聖武天皇の第一皇女、井上内親王とその子他戸親王が無実の罪で幽閉されていたのもこの須恵の地だった。今も幽閉されていたという没官宅址に小祠が立つ。

そしてこの地は、空海ゆかりの高野山からまともに鬼門方向に位置する。ちなみに弘法大師空海と井上皇女(後の四十九代光仁天皇皇后)には共通の繋がりが有る。それは太陽で、空海は仏教の太陽神、大日如来に仕え、井上皇女は伊勢神宮の斎王として、日の神、天照大神に仕えていたからである

井上内親王・他戸親子は、天皇を呪ったという無実の罪で暗殺された10ようである。人々は(トガナクテシス)と言い、その恨みは深く、桓武天皇周辺に怨霊として崇っていると噂した。天皇は皇后の名を追贈して墓地を山陵(みささぎ)と改名。また龍安寺、御霊神社を新たに創建して霊を慰撫した。ちなみに、空海が作った歌だとも謂われる「いろは歌」にはトガナクテシスという言葉が隠されている。

空海は、国が平安でなければその国民は平和に暮らせない、国王が安泰でなければ、その国民の安寧な生活は続かないとの考えから高野山の裏鬼門方角から井上親子の恨みを慰撫したのではないかと思う。空海は自身の出世ではなく、日本の国とその国民が平和に暮らせることだけを一心に願って、高野山から井上親王親子の恨みを慰撫し、ひいては桓武系天皇四代の安寧を、その国家と国民のために願ったのだと井角は考えていた。

そのような歴史のある五條市から、ひかりの会を発足させたかった。地形を考えると、吉野川が南にあって西流し、北側に控えた金剛山を背に、国道二十四号線が東西に走る。正に四神相応の地とも言える、この須恵町辺りが良いと思う。でも商店や住宅が密集したこの地は、先のことと考えるとあまりにも狭小で後に困ることができそうだった。いろいろ考え、その辺りを見回してみると、須恵町より少し北の、ジェイアル五條駅の北側にある新興住宅地が良いと思った。そこは金剛山の南麓にあたり、南方を見渡すと真正面に吉野三山の銀峯山と金峯山がはつきりと見渡せた。

(よし、この地に集会所を設けよう) 井角は心で決めた。

では、具体的にはどのような活動すれば良いか。

山辺光雲が主宰していた「ひかりの会」は、ホームページを作っていないなかった。

著作を数冊出版していたのと、あとは口コミだけだった。

井角はインターネットに力点を置いて広報活動しようと思った。早速ホームページを立ち上げて会員を集めようとした。

今、日本は大きな曲がり角に来ていると井角は思っている。このままでは日本が減じる。日本を取り巻く状況を考えて、ある意味第二次大戦前の状況とよく似ているのではないかとも思えた。井角は先の大戦の終戦の年に生まれたので実際その時代の状況はよく知らない。戦前・戦中・戦後の詳しい状況は、後に見た新聞や戦後に出版された書物でしか知らない。

井角が後に知った歴史では、連合軍、特に米軍の圧倒的な軍事力により、雌雄を決する大海戦に日本軍はことごとく敗れ、昭和二十年を迎える頃すでに日本の敗戦は決定的なほど打撃を受けていた。それで航空防

衛能力を無くしていた東京・横浜をはじめ日本の大都市にアメリカは大型爆撃機を遠征させ、焼夷弾を雨あられと投下して日本を火の海地獄とした。炎で退路を断たれ逃げ惑う民衆に戦闘機から機銃掃射を執拗にあびせた。更には無情にも原子爆弾を広島に続いて長崎と、二発も投下し何十万もの命を一瞬にして奪った。日本は先の大戦で完膚無きまでに打ちのめされたのだった。

アメリカは、あまりにも惨い原爆の戦果に多少の自責の念があったのである。戦後しばらくは日本に対して寛容なところが多くあったように思われる。

アメリカを主体とする連合国の「日本統治政策」が効を奏してか、敗戦後の日本人は、アメリカ合衆国のことを「アメリカさん」と言い、連合国司令長官マッカーサーを「マッカーさん」と、さん付けで呼び慕ったようなところがあつた。

戦後日本の教育は、子供たちに「この戦争は日本が悪かった。その悪い日本にアメリカさんが罰を加えたのだ」というように生徒達に教えた教員が多くいたようだ。井角も小学生の頃、そのような教え方をされた記憶がある。中学生の頃の教育でも「日本は参戦を宣言せずに真珠湾を奇襲した卑怯な国だった」と先生から聞いた。

連合国、特にアメリカの指令のもとに「日本教職員組合」が組織された日本人の思想を根底から変える為に育てられたのだ。日教組に属する彼ら教職者らは、それまでの日本式教育を悉く否定する教育方針に則り、洗脳教育が始められたのだった。

正義の国、世界の警察を標榜するアメリカは、キリスト教を信ずる神の国で、世界中の悪を正すというように子供達に教える教育者が少なくなかった。戦後の食糧難の時、スキムミルクを無償で配給したり、農地改革で小作農をなくしたり確かに戦後の一時期、善政を日本に施したよ

うなところが見受けられた。

大人達でさえ、自分の子供や伴侶を殺されていながら、その事は言わず、アメリカさんを有り難いと感じた者も多くいたと思われる。

「あの戦争、もし日本が勝っていたら、相手国をこのように寛大な治め方はできなかっただろう」とか

「日本は、この戦争むしろ負けて良かった」

「すべて軍部が悪かったから、この戦争を始めたのだ。これで正しく生まれ変わる」

等々の意見が国民の中に多く芽生えていたようだった。

しかし、現実はそのようではなかった。

日本人の多くは、アメリカの深謀遠慮に騙されたのだった。

アメリカは、すぐ「ジャスティス/JUSTICE」という言葉を使うが、現実のアメリカに正義はなかった。

その事は、戦後日本がめざましく経済発展をして、世界に冠たる経済大国になった頃に分かった。その頃からアメリカは馬脚を現し始めたのである。

一九八〇年代以降、一流の製造技術力を誇る日本の大企業に対して様々な難癖を付け、罰金や制裁金を取っている。一方で同じ陣営の独占的世界企業はそのまま放置したりしている。

特に、今のアメリカに正義は全く無い。

一方で、「グローバル・スタンダード」「ワン・ワールド」等々、アメリカに都合の良い基準を押しつける。

アメリカは正義を行うどころか戦争屋で、世界中で不正義を行っているのである。

一方、その不正義に手を貸している売国奴的日本人がいる。一部の政治家、学者、ジャーナリストである。それに、あろう事か仏教系の新興宗教家にも売国奴がいるようだ。

「大和ごころを取り戻さなければ、このままでは日本は滅びる」と井角は思う。アメリカは、と言うより、アメリカの背後にあつて世界支配を目論む勢力は、気をつけなければまたぞろ日本を戦争に巻き込もうとしている。今までもそうだった。古くは幕末の黒船来港以降のことである。

西欧列強、特に英・米と仏は、呼応するかのようにそれぞれ官軍側と幕府軍側に近づいて日本を二分するような内乱を勃発させた。それで強大だった江戸幕府を倒し明治維新を演出した。

『シオンの議定書』には次のような文言がある。

「人民を無秩序な群集に一変させるには、かれらに一定期間自治を与えるだけで十分である。与えた瞬間から、共食い闘争が勃発し、階級間戦争に発展し、その真ただ中で国家は焰に包まれて炎上し、かれらの権威は一山の灰燼に帰するであろう」

ここで言う“共食い闘争”というのが内乱のことで、これを計画的に仕組んで、狙った国家を支配していくのである。

その後も日清戦争、日露戦争を巧妙に勃発させて世界支配を拡大させていった。これは正に「シオンの議定書」にある通り「各国が結束して我々に対して蜂起するならば、我々は米國、支那また日本の大砲を向けて応酬するであろう」とするシオン賢者の議定書を地で行ったものである。この考え方がロシア帝国を倒し、清王朝を滅ぼしたのだった。フランス革命も同様のシナリオに基づいているのはいうまでもないだろう。

「日本は今、亡国への道を突っ走っている。」

井角にはこのように思えてならなかった。

ホームページ上で、ひかりの会の集まりで、事あるごとに次のように話し警告していた。

「近年、日本には様々な災害が降り掛かって来ています。一周干支六十

年は昔から一つの区切りですが、第二次大戦後に日本の神々や英霊達によつて、改めて列島に築き廻らされていた結果が、戦後六十年を過ぎた今、ここに来てまた綻びはじめているような気がするのです。それで日本には、様々な災害や苦難が次々と襲いかかるような気がしてなりませぬ。このように日本を取り囲んでいた靈的バリアーが崩れはじめたのは、如何なる事に起因しているのでしょうか？それは、『大和ごころ』を忘れた日本人があまりにも多くなってきたことが原因ではないでしょうか？」

また、次のようにも言った。

「和を尊ぶ日本人、人を思いやる日本人、礼儀正しい日本人、勤勉な日本人は、いったい何処へ行つてしまつたのでしょうか。大和ごころを持つ日本人が少なくなつてきたことは、日本が危うくなつてきたことと決して無縁ではないと思います。揺るぎはじめた日本を立て直すには、まず日本人としての矜持を正すことからはじめなければならぬと思うものです」

敗戦の後、講和条約を締結して独立国になつたはずの日本だが、そのまま米軍が駐留して、その実態は昔も今も米国の属国の域を出ていない。世界を支配しようとする勢力は、アメリカという国を通して、その背後からすでに日本を支配しているようである。有事には日本を護るはずの自衛隊も、実のところは米軍の指揮下にあると思われ、災害救援は別として、軍事的には日本政府の指示系統では動かず、命令は米軍から出されることであろう。

日本経済は一九八五年九月のプラザ合意によつて莫大な為替差損を余儀なくされ、そしてそれからの極端な円高誘導で貿易市場は閉塞し、青息吐息の状態に追い込まれたのである。

貿易立国の日本は、それでは立ち行かず、日本の製造業はこぞつて海外、特にアジアにその製造拠点を移したのだった。それが、近年は逆に

円安傾向にシフトされつつあり、製造業の一部では又国内に製造拠点を戻そうとしている。

金融界に置いても、今や民族資本の大銀行は殆ど外資系金融資本の支配下に置かれたとみられ、このことから歴史のある大企業ですら独自経営の危機に脅かされている。

日本政府に高額紙幣の発行権は事実上無く、政府は少額の貨幣のみの発行に留められている。日本の高額紙幣は、日本銀行が一手に握っているのである。この国の名を冠した日本銀行だが、実態は株式会社で、株式はその大半を日本政府が持っていることにはなつていないもの、外国勢力の支配下にあると見える。

経済界のみではない。世論を導く重要な報道・マスコミ、学問・教育ほか、主要な産業の殆どと言つていいほどが彼等の勢力下にくみこまれているのである。

どうしてこのようなことになつていくのだろうか。

それは敗戦以降、外国に利益供与しようとする国内勢力が存在するからであろうか。しかし、よくよく考えてみると、日本にとつての負の仕組みはもつと遡つて見られるのである。その萌芽は黒船来航から始つたと言えるのではないか。

薩摩・長州連合と徳川幕府間の内戦を仕組まれ、古き良き伝統の国日本は破壊された。そして戦費を貸し付けられて富国強兵のスローガンのもとに海外派兵。

国威発揚になつたと日本中が歓喜した日清・日露の戦勝も、実のところは代理戦争をさせられていたようで、すべてはあの「シオンの議定書」に書かれたとおりだった。その後はご存知日米開戦を経て、悲惨な被爆後の敗戦を迎えたのだった。

戦後見事な復興を遂げたと見えた日本経済だったが、それはつかの間のことであつた。そして現在、日本経済は目も当てられない状況になつ

ている。このままでは本当に「日本沈没」となるだろう。今手をこまねいては将来で悔恨することになるであろう。今こそ、神道界・仏教界がこぞつて立ち上がるべき時ではないだろうか。

宗教界が率先して実行力のある強力な政治家集団を創り育て始めてほしい。井角建は心からそう思うのだった。

四、和光神社

井角建(いすみたける)は、ひかりの会本部を五條市北部の、金剛山麓にしようと考えた。自分は西吉野生まれなので、子供の頃からその辺りのことはよく知っていて馴染みもあった。井角が生まれた村から最も近い町が五條だったので、バスや自転車で行き来していたからだ。

でもそれは五十年以上も前のことであつた。その頃から比べると五條市内の町や村は過疎化が進み、賑やかだった商店街はシャッターが降りて人出は無く、乗り合いバスも路線が廃止されたり便数削減されていた。大勢の人々がたえず往来し、バスやタクシーでいっぱいだった駅前は、今はひっそりとしている。道路網が整備されて自家用車が増えた。五條駅の北側には広大な住宅地が造成され、ショッピングセンターが出来たため、生活様式も様変わりした。このショッピングセンターの近くに井角が「ひかりの会本部事務所」にしようと思った物件があつた。

日曜日、井角は編集デザイナーの埴生佳与(はにうかよ)をその予定地に連れていった。彼女とは付き合いが古く、大抵のことは相談している。今回のことも佳与はどう思うか聞いてみたかった。いずれは手伝わってもらおうと思っていたからだ。

訪れたのは広告前の一戸建ての賃貸物件である。建物は完成済みだったが前庭の部分は未だ工事中だった。五條に行った時はいつも行く喫茶店ママの紹介である。その幹旋業者に来てもらい建物の中に二人は入れてもらう。一階にリビング・ダイニングがあつて奥は和室になっていた。二階には三部屋がある。

ひかりの会は、まだ会員が少なくて経費がまかなえないので事務所を持つていなかった。

「佳与さん、どうやろう、ここへ引越して来れないかな？前にも少し話したと思うんやけど、ひかりの会の事務局の仕事を手伝って欲しいやけどなあ」

一階・二階と一通り見て回つたあと井角は佳与の顔を窺い見て聞いた。「私の編集の仕事はどうなるのよ」

「私の方は三人でやっているのよ。いつも相談しながら仕事しているの

で、ちょっと勝手がちがってくるわね」

「ネット通信の活用で何とかでけんか？」

「ひかりの会の事務仕事って片手間で出来る仕事量なの？」

「多分。今のところは会員も少ないので大して手間はかからない」

「具体的にはどのような仕事があるの？」

「月一回の勉強会の案内状の作成と発送やね。それに会員や入会希望者からの問い合わせに対する返事がある。これはメールと手紙やハガキやな。それと……悩み事や病気の相談がある」

「私は事務的な仕事しか手伝いはできないわ」

「それで結構。僕も毎日出勤するので事務的な事だけ引き受けてもらえればそれでええよ」

はじめはそれで良い、それで行こうと井角は思った。始めから負担を

かけすぎると退かれてしまう。

将来的に、佳与には会の基本的な運営を任せ、会長の自分と会員との仲立ちをしてもらおうと思っていた。佳与にはそういう能力があると井角はみている。それだけではない。会員からの様々な相談事に対応できるだけの霊的能力があると思う。

「でもねえ、ここを事務所にするとなると、あなたが言うように私が引越してくるしかないわねえ。それには、少し改造して私が二階に住込めるようにしないとイケないわねえ」

「そうしてもらえると、とても助かるけどね」

「でも、この家賃や経費はどうするのよ。全部あなたが払えるの」

「それは相談なんやけどね…」

二人は話しながら二階に上がって行った。二階にもトイレがあり、和室と洋間が二つあった。

「ここから吉野三山が見えるんやで」

井角は南側和室の雨戸を開けて佳与に言った。

「正面が白銀岳で、左側が黄金岳や」

井角は指で前方を指し示して言った。

「どうや、最高の眺めやろ。右側の奥にはこれも吉野三山の一、銅岳があるんやけど、それは良く見えない」

「ここを「ひかりの会」の本部事務所として発足させたいと考えていると井角は佳与に言い、具体的な相談をしたいと夕食に誘った。

改めて近日中に連絡しますと業者に言い、二人は五條の物件を後にした。五條市内から吉野川沿いを下市町方面に向かう。

一昨日井角は吉野寿司の名店「つるべ寿司佐助」を予約していた。解禁になったばかりのアユを、佳与に食べさせたかったからだ。佳与はアユには目がない。特に塩焼きが好物だった。

この店は、歌舞伎「義経千本桜」の舞台にもなった店とも謂われる老舗で、吉野川に架かる千石橋を南岸に渡って左手奥にある。店構えはベランダ塗りの赤壁で、一見遊郭風の古風な木造建築である。玄関は料亭の趣があつて、繁盛したであろう昔が偲ばれた。

店主らしき年配の男性に案内されて通った廊下や階段は見事なまでに清掃がなされている。五時過ぎの予約だったので、店内でも明るかった。

二階の広々とした座敷に案内された。吉野の鮎が解禁されたばかりのためか、この時間の来客は自分たちだけのようだった。

座敷の表通りがわに長い廊下があつて、窓から町内が見えた。反対側の山手の窓は開かれていて、青葉の茂る斜面から心地よい風が時折座敷に流れてくる。二人は立ち上がると窓際に行った。

窓から手入れの行き届いた中庭が見下ろせた。

若者が、お盆に瓶ビールとグラスを乗せて座敷に入って来た。先ほど案内してもらった時、まずビールをくださいと注文してあったからだ。若者は年配の男性に似た感じだった。ビールと一緒に小皿が添えられ、見るからに新鮮な枝豆が入れられていた。

「先ほどの方は、ここのご主人ですか？」

井角は若者にたずねた。

「はい、私の父親です」

「よく似ておられて、そうじゃないかと思いましたよ」

井角は思った通りに言った。

「よくお客さんからそのように言われます」

若者は笑顔で話し、次ぎに出す料理の説明をする。

「鮎が解禁になったばかりでしょ。まだ手伝いが揃ってないのです。それで今日は親父が作る料理を私が出して来ます」

こここの二代目らしき若者にはこやかな表情で言った。

「次の料理の時、冷酒をお願いします」

井角は冷酒の銘柄を聞くと、五條の地酒だったのでそれを注文した。

二人はまず、ビールで乾杯する。

枝豆をつまみながら飲んでみると、前菜の小鉢と鮎の刺身が出された。

出されてくる料理は鮎づくしの懐石風で、一目で天然物と分かる。

料理は見た目も味も申し分のないものだった。

「ところで佳与さん。あのひかりの会の物件はどう思う？」

「悪くないと思うわよ」

「では賛成してくれるんやな」

井角は佳与が反対するのではないと知って安心した。

「事務所のことより、会の運営はどうなのよ。うまく行ってるの？」

佳与は経費のことが気になっていろいろしかった。

「順調とは言えないなあ」井角は現状を説明しはじめた。

まず、金儲けが目的ではないこと。はじめが肝心なので会員は慎重に選びたいこと。それで今は積極的に会員集めはしていないこと。入会希望者や様々な相談事への対応は、メールや手紙で自分自身が対応していること。特別な面談は大阪市内まで出向いて、ホテルや借り応接室です

ませていることなど、料理を食べ冷酒を飲みながら佳与に話した。

「そのような訳で、会の運営は経済的に苦しい」

と井角は言い、様々な考えから、実は本部事務所は佳与さんの名義で借りてほしい。あなたへは私から家賃として毎月支払うので、思っている事をそのまま話した。

「考えさせてもらおうわ」と佳与は言った。

まだまだ井角は話したかったので、場所を変えようと思ったが、飲んだ以上もう車の運転は出来ない。宿を予約しようと相談すると、店の親

父さんが「万石荘」を紹介してくれた。この辺りでは一番の料理旅館だという。店から宿泊予約を入れ、勘定を済ませると、車は明日朝に引き取りに来ますので、とお願いして店を出た。

歩いて一〇分もかからないと思いますよと聞いたので、千石橋に向かう。橋の南詰めを右折してすぐの左側と、聞いた通りだった。

旅館は吉野川南岸沿いに建つ懸崖作り風の館だった。

道路のある表側から見ると平屋建である。和風のこざっぱりした玄関前は、きつちりと水打ちがされてある。もう夕暮れになっていて、玄関周りの照明には料理屋らしい風情があった。

玄関に入ると、粹な感じの中年仲居が部屋の案内に立った。

北側の窓辺から真下に吉野川が見下ろせる部屋に通された。

「よう、お越し」

仲居は丁寧に手をついて挨拶すると、何かお飲みになりますか、それとも先にお風呂にされますか？と聞いてきた。

料理旅館なので料理を注文するのは常識だったが、今日は前もつての予約ではなかった。

「何ができますか？」

井角はできるものを聞き、鮎の刺身、鮎の塩焼きをそれぞれ二人前とビールを注文した。

「すみません。先にさっと汗を流して来てもいいですか」

「もちろん結構です。どうぞ」

仲居は笑顔で答え、お泊まりは階下に部屋をお取りしますので、そこから浴衣をおもちくださいと地階の部屋に案内した。

仲居は浴衣を二人に渡して言った。

「お風呂が済みましたら、お料理は先ほどの一階でお願いします。お寝床はお食事中に、この部屋に敷いておきます」

二人は浴衣とバスタオル、手ぬぐいを持って浴室へ向かった。浴室は

男女別だった。

浴衣姿で一階の座敷に戻ると、先ほどの仲居が食事の用意をしている。食卓には低めの和椅子が添えられてあり、足もとが楽に飲食できそうだった。

しばらくして佳与が風呂から戻ってくると仲居が二人のグラスにビールを注いでから言った。

「鮎漁が解禁になりましたね。やっぱりこの時期の鮎が一番美味しいですよ。旦那さんも勿論ピチピチとした若鮎は好きでしょ」

「そうですね。でも僕は鮎が大好きと言うほどではなく、やっぱりマグロの方が好きですわ」

「では、ヤマメは如何ですか？山に女と書く魚ですが……旦那さん、女性はお好きでしょ？」

色っぽい目で仲居がほほ笑んだ。

「いやー、僕はヤボな山里育ちでねえ。勿論女の人は好きやけど、川魚は余り好きではないんですわ」

一目で二人の関係は見抜かれていると井角は思った。

「あ、そうそうマグロの刺身ができないかな」

「板さんに聞いてみます」

「中トロが好きなんです。なければ海の魚だったら何でも良いので適当にたのみます」

井角は心付けを手渡した。仲居は礼を言っ部屋を出て行く。

「ひかりの会のことやけどね」

佳与に向き直って、昼からの話しを続けた。

「まず最初に、ひかりの神さんの神社を建てたいんやけど、どないかなあ？」二人だけで話すときはやはり大阪弁になる。

「お祭りする神さまは何という神さんの？」

「それは勿論アマテラスさんや。光と言えば太陽、お天道さんや。仏教で言うたら大日如来さんやなあ」

「ほな天照大御神(あまてらすおおみかみ)さんと言うこと？」

「僕は天照皇大神(あまてらすすめらおおかみ)とお呼びしたいと思ってる」

「そしたら、お伊勢さんと同じ神さん違うの？」

「僕は違うと解釈してるんや。皇大神の皇(すめら)の字は、天上の偉大な王、宇宙の王を意味しているはずやからね」

井角は自分にうんうんとでも言うように頷いてみせる。

「僕は、神社名を『和光神社』として創建し、その祭神は『天照皇大神』と決めているんや」

「和光神社って、平和の和に光と書くのん？」

「そうや。字はそのように書いてヤマトの光という意味を表したいと思17
うてる」

「その神社名は、聞いたことがあるような気がするわよ」

「そうか？、その通り、外にも何箇所かにある。同じ神社名は仕方ない。ヤマトの光の神さんやから和光神社や。これしかない」

「和光神社。私もそれでええと思うわ。でも新興宗教みたいなこと始めたら、きつと苦労するわよ」

「うん、それは分かっている。せやけど、しないといかんと思うんや。」

佳与さん、今の日本の状況、危機的やと思わへんか？」

井角は熱っぽく語り続ける。

政治不信、医療不審のこと。蔓延する貧困、行き過ぎた社会保障と生活支援制度で増え続ける国家の借金のこと。定職に就けない若者達のこと。アメリカの隷属国家に成り下がった日本のこと。裏で手を廻して同

じアジア人同士に戦争させようとする戦争屋のこと。アメリカ主導の強引なTPP交渉で壊されてゆく日本の農業のこと。生産しないで巨利を貪るマネーゲーム、世界から富を収奪する国際資本のこと。日本プレミアムと言われる日本向け原油の高価格のこと。国家収支が赤字でも国際支援の名で大判振る舞いをさせられている政府のことなど、井角は愚痴のように佳与に話し続ける。

そうする間も止まる事なく、国籍のない巨大な資本は利益を求めて世界を駆け巡っているのであった。

様々に収奪されている日本は、このままでは近い将来国家破産の憂き目を見るのが必定と思われる。国が財政破綻すると、IMFの管理下に置かれ、債権者の国際通貨基金・再建プログラムが債務者の国民に優先して行使されることになる。これが一番怖いのである。豊かだった日本人は自由が奪われ文字通り、その日から『借金奴隷?』に成り下がってしまうのだ。その日は突然やってくる。

これから逃れられる方法は、まず日本人としての矜持を正すことだと井角は思う。見てみるが良い、例えばテレビのバラエティー番組を。あれを見て、世界の誰が日本人を尊敬できるだろうか。

まず、制作者へのへつらい、低俗な笑いを取ろうとするゲイノー人達の下卑た卑屈な笑い顔。雑壇に並んだ程度の低いワンパターン番組。これらのオンパレードだ。これは視聴率優先の番組制作方針の所為でもある。どうか番組提供のスポンサーは、低俗な番組の提供から降りてもらいたいものだ。提供しているスポンサー会社のイメージが悪くなるとは考えないのだろうか。勿論、良い番組もあることはあるが良質な番組は少ないと思う。

井角と佳与は冷酒を飲み、仲居が運んできた刺身の盛り合わせなどをつつきながら話しつつづける。

「あんたは教祖になりたいの?」佳与の言葉は核心に入ってくる。

「さあ、それは…」井角は佳与の目を見て一息ついた。

「それは、傍から見るとそのようになるかな」

井角は佳与が注いだグラスの冷酒を一口飲んだ。

「光雲先生の遺志を継ぐとそのようになる。でもな、正直に言うと、先生のような高い霊能力はない。ある程度の霊感はあるとは思うんやけどな。まず今のところは、まだ神降ろしがようせんのや」

「そんなら、あんたは何ができるの?」

「そうやな。いろいろな相談に乗れる。道しるべを差し示す。これは佳与さんにもできるわな」

佳与は更に突っ込んで、そしてそのほかに何が?などという。

「靈感を高める指導をする」

佳与が、それだけ?という表情をする。

「病気治しができる……いや、これは病状を改善すると言い直した方が18ええと思う」

「でも、それは法的にむつかしいのではないの?」

「うん、確かにそうや。だからアドバイスして本人の意志でやらせようと思う」

「微妙に問題がありそうな気がするけど……」

「でも、本当(ほんま)に病気が治せるんやで。ほとんどの病気は薬や手術なしで治せる。このことは何度も自分の体や身内で試した」

「そうやね。医者や薬はあまり信用できないところがあるわね」

「はつきり言うと、薬はほとんどが毒や思うたほうが良い。また手術はこれも、ほとんどと言ってよいほど止めた方がいい」

「何もしないでほったらかしが良いと言うの?」

「いや、適切な手当てをするんや」

「それはどういふこと?」佳与は食いさがる。

「美しい水をたっぷり飲んで、まずは休養すること。患部と覚しき処に、文字通り手を当て念波を送る。これで大抵の病気は治る。下手に切った薬の力を借りると、却って悪くなる。それが免疫力を阻み、自然治癒力を弱めることになる」

「自信のありそうな言い方やねえ。あんたが言うのと、何かその通りと思うてくるわ」

井角は更に言う。

ひかりの会の大事な仕事は、悩みの相談や病気治し、靈感開発ではないに、どうすれば平和な世の中を続けられるかなのだと。

身近な問題で言えば、どうすればお隣さんと仲良く暮らせるかである。広げて考えると、日本がどのようにして近隣諸国と友好関係を保ち続けられるかだと。これが良好な関係となれば、おのずと世界各国とも平和の輪を広げられる。そのためには相互理解が必要である。現在の日・韓・朝・中国には歴史的に解決されていない遺恨が残っている。この問題をどうするか。同じ漢字文化圏なので、話し合えば理解の道が開けるはずだと。

「ひかりの会の勉強会では、東洋史をふまえた日本史の勉強をしよう。やっぱり我々は、大いに古代中国・古代朝鮮文明の恩恵を受けて来たのだから」

知り合った当初から、佳与は健康家で酒飲みだった。今もグルメでアルコールは減法強い。井角は佳与のグラスに、冷酒を切らさないように時折注ぐ。

「それにねえ、民族的にも中国や朝鮮は親戚や兄弟と言って良い」

井角はその根拠を、ある大学の信頼できるデータを示して、日本人に固有のタイプ、日本人だけに見られるDNAは5%未満しかない。大ざっぱに日本人のタイプを四分割すると……

●原住民系 25%、 ●朝鮮系 25%、 ●中国系 25% ●その他 25%と

なる。と言ってから、アイヌ族、蝦夷・熊襲・隼人は、原住民系に入れての話だと説明するのだった。

「なんか小難しい話で、眠とうなってきたわ」

佳与が眠そうな顔をしていたので、井角は、ぼちぼち寝ようかと言いついでに階下に降りていった。

座敷には、布団が二組、少し離して敷かれている。

井角は一方の布団の片端を引いて、くつつけた。

佳与は井角の左側の布団に入る。

窓辺からは吉野川の水音が、サワサワ、シャワシャワと聞こえてきている。

五、近隣諸国との軋轢

ひかりの会は、五條市に本部事務所を設けた。

以前に井角が佳与と下見をした場所である。

はじめ井角は、佳与に引越をしてもらって、2階に住込んでもらうつもりだったが、実際問題となると佳与の仕事ができなくなりそうなので、佳与には土・日・祝日で、都合がつく日だけ頼むことにした。デザイナーの仕事をやめて、ひかりの会の仕事に専任してもらうのは、会の運営が軌道に乗ってからのしようと思う。

それでも、和光神社の建設だけは先延ばしにはできないと思い、敷地の北側に小さな半間社の本殿だけを建立した。借家だったので大家さんに、移転する場合は元に戻すという条件付きで了解を得たことである。

祭神は天照皇大神である。本殿内陣にはご神体とする神札を祭った。それは光雲師直筆の神名札である。その神名の右肩には、師の指先によ

る朱肉印が縦に三つ、下部にも同様に五弁の桜花を模した朱肉印が添えられたものであった。

和光神社の鎮座・創建祭は、何処の神社からも神主には来てもらわず、神職の心得がある井角自身が祭主となり、佳与を助勤にして齋行した。参列者は、ひかりの会の会員が任意で集まった少数の人達だけだった。

井角は本部事務所に毎日出勤した。会員との直接相談などで出張の場合、都合に応じて佳与に留守居を頼んだ。

会の活動は低調だった。井角の方針で会員を積極的に増やそうとはしていなかったからでもある。

その頃、自民党が政権を担っていたが、日本は内外に様々な問題を抱えていた。内政では、産業界が振わず失業者が増え続けていた。好調なのは自動車や工作機械など一部の工業製品だけであった。その他電気製品や電子機器などは様々な事情で、日本の進出が阻まれていたのだ。

外政では、日本は国際社会において活躍ができていなかった。国連に於いても、近年は要職から遠ざけられていた。日本が国際社会に貢献できたと言えるのは、国際協力の名で開発途上国から拠出を求められる様々な援助資金だけだった。その一方では近隣諸国から様々に圧力が加えられ、国境線も度々脅かされた。北方からはロシアの漁船が北海道近海の日本の領海域で操業した。韓国は中国と合同で日本海において軍事訓練をしていた。日本への威嚇である。

また中国は、日本の重要な航海路のマラッカ海峡において、日本商船の通行を度々妨害した。

日本は周辺諸国に舐められている。このままでは日本は侵略されてしまう。そういう論調が一部の新聞や週刊誌からはじまった。それにと

なって一般世論としても、そうした声が巻き起こってくる。しかし日本は戦争を放棄した国である。憲法が交戦を許していない。

憲法を改定して自衛隊を軍隊に格上げしようという意見が当然ながら上がってきていた。

一方の慎重な意見として「これは日本を再び戦争に巻き込もうとする陰謀だ。戦争だけは如何にしても避けなければならない」とする声も当然ながらあった。

日本は大変な曲がり角に立たされていた。

日本政府は周辺諸国からの国境線不法侵入に手を焼き、対策を考えた。度々国会の審議でも、この問題が討議された。国会はいつも紛糾した。野党の一部からは、これならいっそのことアメリカの属国になってしまおう方が良い。独立国家であるはずの現在も隷属させられているのだから。思い切ってアメリカの一つの州に組み入れてもらったらどうかというよ²⁰うな極端な意見も出された。それについては与党の一部議員からも「そうだ、それなら彼の国は手出しのしようがないだろう」と賛成があった。

それでは、国民投票で決めようという話にもなったが、実施段階で先延ばしされた。

世論が防衛問題で揺れ動いているとき、首相の諮問機関の一員から、誰に聞いたか、ひかりの会・会長の井角に、日本の将来について「内々の参考意見を」との御注意付きで相談があった。

井角はかねてより日本の先行きを憂いて、自分なりに国家運営のありかたを思考していたので、これを機会と捉え、日本の未来構想として、その要点を次のように具申した。

- まず、用心のため首都を西日本に移すこと
- アメリカの五十一番目の州になること
- 日本州の内に特別区を認めてもらうこと
- 奈良県を特別区とし、日本D.Y. (District of Yamato) と呼ぶこと
- D.Y.に天皇の居住する都を定めること

井角は、首相に会う機会が与えられたら次のように言おうと思う。

……世界は、理想として一国家、一言語、一通貨になることが望ましい。そしてその連合国家を治める盟主国は、世界で最も気高く歴史のある国でなければならぬだろう。それには日本が最もふさわしい。それには、まず第一段階としてアメリカに世界の覇者になってもらう。その上でアメリカから委託を受けて日本が、その世界連合国の盟主となって全世界を統治するのだ。まさに文字通り United Nations の誕生である。

……
実際の運営としては、連合国内は一つの共通語(公用語)と、方言とも言える各国語の併用とし、連合国法を基本としての法律も、風土や歴史、習慣に応じて柔軟に運用されることが理想だ。

そのようになれば「内平らかにして外成る」、また「地平らかにして天成る」と、中国の古典(史記、書経)から引いて、平成の年号に込めた願い通り、世界に平和がもたらされるかも知れない。そのように日本が世界のリーダーになれば、世界のどの国も素直に日本に従うのではないか。何故なら、世界の支配者たる証拠の品がある。それは「聖櫃 Ark」だ。それには世界の秘密が隠されている。今までは、その聖櫃の秘密が何であるか分からなかった。しかし、それが少し解明されそうな希望が出てきたのである。

そのきっかけは、真秀(まほ)が見た夢だった。

井角は、真秀に初めて会ったときのことを思い出した。それは和光神社の鎮座祭の日だった。参列者の一人として佳与が連れてきていたのだ。

「井角さん、これは私の娘です。真秀(まほ)と言います」
紹介した時、井角のことを、さん付けで呼んだ。

つきあい始めてこのかた、井角の名を呼んだことがなかった。いつもは「ねえ、ちよつと」とか「あんた」とか呼んでいたのだった。

紹介されたその時、「真秀です、はじめまして」と丁寧に頭を下げた女の子は、すらりとして背が高く、黒髪を肩まで伸ばした美しい娘だった。大学に入学したばかりだといった。

井角は驚いた。佳与に娘がいたとは聞いたことがなかったからだ。

初対面にも拘わらず、井角には何か親しみが感じられて、前からよく知っている子のように思われた。

佳与と二人だけになった時、井角は聞かずにはいられなかった。

「佳与さん、あの娘(こ)は本当にあんたの子か?」

「そうよ。紛れもなしに私が腹を痛めて産んだ娘だよ」

「そんな事聞いたこと無かったやないか」

「言う必要ないし、黙っていたんよ」

「誰の子やねん?」

「誰って?私の。前の彼の子やよ」

「あんたは子供を内緒で育てていたんか?知らなかったなあ」

「赤穂の私の実家で父が育ててくれたんよ。赤ちゃんの頃は兄夫婦が同居していたので義姉が自分の子同様にしてくれた。その頃も私は、仕事をしないことには食って行けず、自分のことだけで精一杯で、とても子供まで育てる力がなかったんよ。せやから実家に頼んで預けたんよ。せめて養育費だけはと兄夫婦に払っていた」

「前の彼は子供の認知をせず、養育費も払わずか?」

「まあね。特に証明もでけへんし、言うてないねん」

「相手の子やったら、話せば解るとちやうか？……」

井角はそう言ったあとですぐ、まさか？と戦慄した。まったく自分の身に憶えはないと言えなかった。

「まさか？佳与さん、……」

井角と佳与は目が合った。井角は佳与をじっと見つめる。

先に視線を外したのは佳与だった。

「アハハ…、アホやなあ。あんた自分の子やないかと思うたんか。そんなハズないでしょ。私の娘の真秀は、背も高く美しいで。あんたの子がそんなにスマートになると思う？」

佳与は、アハハと笑い、井角も、そらせやなあ、俺の子やったら、あんな美しい娘にはならんわなあと言葉を返した事を思い出す。

一年位後のある日、佳与は娘の真秀が見たという夢の話をした。

「魔王大権現という神さまが夢に出て来て、『墓前に世界の秘密を記した金属板を埋めている。これには世界中の誰も知らない科学知識が、詰め込まれた記録板である』と言った。また、『この金属板は表から見ても何が書いてあるかは解らない。でも、ある能力を持った人が手を当てると即座に内容が理解できるようになっている。その人の手に手渡すまでは、決して触ったり加工したり、計器で観測したりしてはならない』と強く戒められた」というようなことを真秀が佳与に話したというのだ。

井角はこの佳代からの話を大変興味深く思った。この話を聞いて直感的に、これが世界中が昔から探している「聖櫃 Ark」ではないかと思ったのだ。

「魔王大権現」と確かに言っていたという。井角はこの権現の名の記憶があった。確かに何処かで聞いた、或いは見たと思う。

ネットで検索するが出てこない。念のためと自分のホームページを見直して分かった。

自分のホームページでは「竜王神社」がその掲出ページの見出しだったので気付かなかったのだ。その頁に目を通して、以前に一度参拝したことがあることをはつきりと思い出した。

それは吉野三山の一、櫃ヶ岳またの名を銅岳という山に、「銅岳魔王権現」の名で祀られている神様だった。この神がおそらく真秀の夢で託宣した「魔王大権現」のことであろうと思われる。

櫃ヶ岳について井角は思い出すことがある。

それは子供の頃、祖母に連れられて白銀岳の波宝神社へ参拝した時、見晴らしから南側に見える櫃ヶ岳を指さして「あの山には宝物が埋められるんやで」と話してくれたことだ。

また中学生になったばかりの頃、母親からも「あの山には大切な唐櫃（からびつ）が隠されてるのや」と言われて、それは先祖代々の言い伝えであると同聞かされていた。

成長してからも時々その話を思い出す度、あの話は世界中で探している「聖櫃 Ark」の事ではないだろうか思ったものだった。

「これは是非現地で確かめなければならない」そう思っていた井角だが、墓前に埋納していると言われる物を発掘するには、やはり専門家の助けを借りた方がよいかとも思う。こうした場合は奈良県下であれば、有名な奈良考古学研究所に相談してみるのが一番だと思った。しかしその一方で、「決して触ったり加工したり、計器で観測してはならない」と言っていたということを考え合わせると不安もあった。

もし間違った扱いをされて金属板に記憶されているというデータが、消去されてしまうような事になれば取り返しがつかない。

それに真秀が見たという夢告通りに、そのような秘宝が本当に埋めら

れているとは、一方では信じられない気持ちもあった。

ここはやはり慎重に、自分たちだけで下検分した結果を、判断した方が良いように思う。それに第一、その秘密の金属板が何処に埋まっているか、はつきりと分かっている訳ではなかった。

井角は佳与に、真秀ちゃんを誘って下見に行こうと誘った。

よく晴れた日曜日、井角は東大阪市小阪の佳与のマンションに行き、二人を車に乗せると外環状線を南に走り、三〇九号線に出ると一路下市方面に向かった。奈良県吉野郡下市町貝原にある龍王神社、銅岳魔王権現の周辺を下調べするためだった。

下市町長谷の丹生川上神社下社の辺りから、丹生川を対岸に渡り丹生川沿いを下流に向かうと、森林安らぎ村があって、その向かい側が櫃が岳への上り口になっている。ずいぶん細い道で対向車があると、どちらかが待避場所まで後退しなければならない。幸い対向車もなく七合目位まで車で行き、少し広い場所を見つけて駐車した。

魔王権現は八合目位にあるので、少し手前からじっくり辺りの状況を観察したからである。

ちょうどこの辺りの植生は、赤松が多くなっているので、この時期は松茸が採れるようだった。「松茸林私有地 立入禁止」の看板が至る所につり下げられている。

土地勘のある井角が先頭で歩いた。今日の目的は、靈感が最もよく働く真秀に、聖櫃が埋められている位置を特定してもらいたいからだった。

櫃ヶ岳の八合目位の所、その辺りは山腹斜面がなだらかになっていて、木立もまばらな所に一本の杉の大木があって、そこに「銅岳魔王権現」の小祠があった。

井角、佳与、真秀の三人はそこに屈んで拝礼した。

佳与の娘真秀は、さらに黙祷を続けた後、その辺りの気配を窺うように小祠と神木を一周した。そして井角と佳与の二人に、ここで待っていてほしいと言って、小祠の後方に一人で歩いて行く。

しばらくして戻ってきた真秀は二人に言った。

「その先の地下に金属が埋まっている気配があります」

真秀の示す場所に三人で近づいた。佳与も同様に何かの霊的なものを感じるといふ。

井角は目を改めて発掘に来ようと佳与に言い、その日は皆で帰った。井角は、口の堅いひかりの会・会員に応援を頼もうと思った。

発掘の当日、井角、佳与、真秀の三人は、会員の西野、荒木の二人を加えた五人で再び櫃ヶ岳に向かった。魔王権現に行き、聖櫃と思えるものを発掘するためである。

今回は鶴嘴(ツルハシ)・唐鍬(トンガ)・掬鍬(スコップ)、それに念のため23 鑿(タガネ)と金鎚(ハンマ)を用意した。

この日は曇りだったが、幸い雨は降らなかった。力仕事が多いのでむしろ曇りの方が都合だった。

現地に着いて、真秀が指し示す場所を男三人で掘った。一メートル近く掘り下げたとき、井角が振り下ろした鶴嘴にガツンと衝撃があった。慎重に唐鍬や掬鍬に持ち替えて土を掘り除いていくと、表面が凡そ畳一枚、厚さ五センチくらいの石蓋が現れた。作業がしやすいように回りを掘り下げた。すると小さな石室のような造りになっている。

大きさは、幅一メートル、高さ一メートル、奥行二メートル位だった。その蓋として上部に石版を乗せているようだった。表面の土を除いて拭くと、どうやら四枚の石板を漆喰で接合して覆いの蓋としたものらしい。接合部を慎重に鑿と金鎚を使って切り離し、石蓋を外すと中には粗末な木箱が入っていた。

(これは、聖櫃だ。間違いなくアークだ!) 井角は心で叫んだ。

井角が木箱の止め金を鑿で切断した。

木箱の蓋を開けて中をみると、茶色の麻布のようなもので包(くる)まれた物が入られている。何だろう?と皆は顔を見合わせた。

井角がそれを取り出そうとして手を伸ばす。

「触らないで!」真秀が叫んだ。

その声で、みんなも木箱を触ろうとした手を離す。

真秀は静かに近づいて、木箱の中に手を入れ、茶色の物体に手をかざす。しばらくそのまま様子をみた後、作業手袋を付けてそっとその物体に手を置いた。少し離れて四人が見ている。

「触っても大丈夫みたいです」

その声を聞いて四人は木箱に寄っていった。

真秀は、作業手袋の手で掴んでもちあげた。

「そんなに重いものではないです」

真秀は言い、物体を巻き包んでいる茶色の布を剥がす。

聖櫃に入れられていたのは、「十戒刻んだ石版」ではなく方形の金属板だった。表面には何も記されていないが、ステンレス鋼のような光沢がある。

「世界の宝物が見つかった。これがアークや」

井角は佳与の耳元で小さく囁いた。

真秀は、今度は手袋を脱ぎ、右手の平で金属板にそっと触れる。手の平を通し、記録内容を霊視しているのである。

しばらくして、真秀は大体の内容を把握したようだった。

井角は真秀に意見を聞き、佳与と相談して、その金属板を聖櫃に戻すことにした。四枚の石版を上に乗せ、掘り出した土を元の通り埋め戻すと、腐葉土を上に乗せ、落ち葉を適当に撒いて、矯(た)めつ砂(すが)めつ見ても分からないように、自然の状態に復した。

科学技術が飛躍的に進んだ段階になれば、金属板の記録内容が詳細に判明するだろうと思えたからだだった。

あとから真秀が井角と佳与に話したことによると、それは超古代の記憶媒体で、それには驚くべき秘密が隠されているという。それは未だ世界の誰も知らない超知識と言っても良い。真秀の霊視では詳細までは判然とはしないものの、凡その記憶内容が掴めたらしい。

真秀によれば、次のような知識だという。

永久原動機、惑星間宇宙船、空中移動車の構造と製造法。宇宙空間の秘密、人間や動植物生命の秘密、究極の万能兵器のことなど、その秘密の知識が詳しく記録されているという。中にはすぐに実行できる技術や、すぐにでも製造できる機械もあるらしい。

その中の秘密の一つに、井角の師光雲がすでに発見していた金属がある。それは、フアニウムという金属で、この金属は磁性を持ち、ある方向24の位置を得たとき、空中に浮揚する性質を持つ。応用は無限にあり大変な価値を持つものと思われる。この金属は、日本のある地域に地下資源として大量に眠っていると光雲師は預言していたものだ。

その他にも師が解明していた生命の秘密があった。これは現代の栄養学を完全に否定するもので、簡単に言えば現代我々が食物として摂っている栄養は不要になる。つまり命の根源の栄養素は、穀物でも肉でも野菜や果物でも無く、それは地球上の空中や水中に遍在している「プラナ」だというのである。

……後に解ったことだが、聖櫃に保存されていた金属板には驚くべき秘密が記されていた。宇宙の成り立ちやその構成、成分も現代科学の説明とは大きく異なったものだった。宇宙や天体の歴史、地球上の人類の歴史も、記されていた真実というものは直ぐには信じがたい内容だった。

その金属板からの解説法は、佳与の娘、真秀が不思議な夢告で得たものが解説のヒントになった……。

真秀は、大学を卒業してからも東大阪市小阪で、母の佳与と同居生活を続けた。

六、奈良遷都

日本は、大きな自然災害に次々と襲われていた。

台風や洪水、地震などである。それに加えて各地で火山活動が活発になってきていた。

中でも日本中が注目して、その成り行きを一番心配していたのが富士山の動向だった。近年中には大噴火を起こさだろうと言われていた富士が、この年とうとう噴煙を上げたのだ。東京五輪を終えた翌年だった。

それまで富士山の周辺では、毎日火山性の微動地震が続いていた。いよいよ大噴火が近いと見た気象庁は観測に本腰を入れはじめた。精密観測をすると山体の膨張が認められた。山中湖では水位が下がりをはじめた。その後、八合目位の東南山腹から初めての噴煙が上がったのである。

いよいよ富士山が大噴火を起こすのは決定的だと人々は噂をした。日本中がニュースに釘付けとなった。富士周辺の村や町は怯え大騒ぎになった。でも、噴火の兆候が見え始めただけでは、引越するわけにもいかない。休日だけに来る別荘生活者や趣味の菜園を楽しむために季節移住して来ているような身軽な人たちは早々と引越をはじめた。みんなが浮き足だつてきても、そこに生活の基盤を置いている人たちは簡単に引越をする訳にもいかなかった。大部分の人たちは「今しばらく様子を見よ

う」ということになる。

政府にとっては「富士山噴火」ということになる、このまま捨ておけない重大事だった。大噴火にでもなれば首都機能が麻痺するのは明白だったからである。

噴出した溶岩、或いは火砕流で高速道路や新幹線が分断される。「これは一大事！」と今度ばかりは、政府も首都の移転を真剣に考え、すぐに候補地の選定に入った。

「噴火に伴って降りそそぐ火山灰の被害の外、北方から侵略される危険もあります。この際思い切って関西方面へ遷都しましょう」

首相の側近たちはそのように言いはじめた。

首都機能を移転するだけでは済まされないと言うのである。では、一番安全な地域は何処か？

首相の諮問機関からは

「それは奈良盆地以外には考えられません」と答申してきた。

政府首脳は考えた。遷都とは帝都移転と同じ意味である。

「天皇にも江戸城皇居から、お移りいただかねばならない」

諮問機関の、ある信頼できる人物はこう言った。

以前にも首都機能の一部の移転については検討されたことがあり、法的には一九九二年に「国会等の移転に関する法律」が成立していた。さらに一九九九年には「国会等移転審議会」が候補地として三地域を選定していた。その三地域というのは、「栃木・福島地域」「岐阜・愛知地域」「三重・畿央地域」の三候補地だった。しかし移転費用は当時で十数兆円とされ、厳しい財政状況下ではとても困難である、そのような費用があるなら、他に急を要する用途が山ほどある等々、反対意見が多く、そのうち首都機能の一部移転問題は立ち消えとなっていたのである。

ところが事情が急変したので今回の審議は、国会等の移転ではなく、首都機能が麻痺するかも知れない事態に対応しての「遷都審議会」であった。

当然前回の三方所の候補地が再検討されたが、最終的に候補地として残されたのは「三重・畿央地域」の畿央地域だった。

そして最終の審議会では、首都としては広大な平地が望ましいとされ、やはり古代より都が置かれた奈良の地が帝都として最も条件が良いということ、最終的に遷都先は奈良盆地と決定された。

あとは専門家集団によって奈良盆地内の、どの場所に都を造営するかを検討がなされた。土地の取得で一番問題になるのは必要な広さが確保できるかどうかだった。最初に目が行くのは藤原京があった地域である。この周辺は史跡公園になっていて、今でも藤原宮及び藤原京の発掘調査が続けられていた。また、「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」として世界遺産登録に向けての下準備を進めている段階でもあったが、この際は緊急事態だった。そのような事より、是が非でも遷都しなければ日本の存続そのものが危うかった。

政府の肝いりで奈良三山に囲まれたこの地域に新帝都を建設することに決定された。

そのように決定すれば、あとはできる限り迅速に工事を進行させるだけだった。歴史的な遺跡の調査や保存など様々な問題が残っていたが、それまでに行われた成果を元に、緊急に調査結果として纏められた。

工事は日本の総力を挙げて進められた。まず皇居、そして国会議事堂と監督諸官庁である。これだけの大工事を富士山が噴火するまでに完了しなければならぬ。

一方、北海道や種子島周辺の日本領海へ不法侵入は後を絶たなかった。中国と韓国は日本海で、日本との海戦を想定した軍事演習を続けてい

たが、いよいよその演習が実戦さながらの様相を帯びてきており、日本への侵攻間近のように緊迫感が漂ってきていた。

もちろん政府は、中国、韓国の両国に嚴重に抗議しているが、演習を止める気配はなかった。日本の自衛隊は離れて監視するだけで直接阻止行動はできなかった。集団的自衛権は認められてはいたが、その頼りとする米軍は、一向に阻止行動をしようとする動きはなく、見て見ぬふりをするばかりだった。

相手は日本を戦争に引き込もうとしているのは明白だった。いや中国や韓国だけでなく、同盟国のアメリカそのものが、日本を戦争に引きずり込もうとしているようでもあった。

その頃には、政府も国民も大体彼等の魂胆が分かりかけていた。それは日本国の存亡にかかわる大事な局面だと皆が承知していた。「ここはどんなことがあっても彼等の陰謀に乗ってはならない」

日本には第二次大戦の悲惨な教訓があった。国家の一大事に追い込まれた日本は、以前までは政府と国民がしよっちゅう対立していたにも拘わらず、この危機を迎えて一致団結できた。

日本政府は、前回中止した国民投票を実施した。

その結果、大多数の国民がアメリカの統治下に加わることに賛同した。その結果をふまえて米国に対して正式に申し入れをすることになった。

「日本は、アメリカ合衆国に加盟したいと希望する。もちろん合衆国の一州となれば貴国の法律に全て従うつもりである」と。

このような意味の要望を正式文書で差し出したのである。

日本側にしてみれば、一戦も交えずに軍門に下るのは、大和魂の武門の国としては些か不甲斐なき過ぎる。

だが日本としては、もう血を流し合う悲惨な戦争はこりこりだった。終戦の日に二度とこのような、血を血で洗うような戦争は決してしない

と心に誓ったのだった。「不甲斐ない」「惨めだ」と言っても先の大戦を思えばいくらでも我慢出来る。少なくとも命は守れるし、血も流さなくと済むのだ。

今回の日本の身の振り方についても、前回と同様に首相の諮問機関の同じ人物から井角建に事前の相談があった。

井角は前回と同様に、次のような意見を述べていた。

……この地上から戦争を無くそうとすれば、全世界を支配できる軍事力を持つ一国家に全世界を統一してもらうことだと思ふ。今世界を見渡して見ると、それはアメリカ以外には考えられない。古く日本の歴史を考えてみても、戦国時代は群雄が割拠してむごたらしい戦争が続いた。それを信長が些か強引な力によって統一の方向付けをした。秀吉がその業績を引き継ぎ、ご存知家康が太平の世を招来した。そのような事を参考にしてみてもどうか。そこで現代の世界だが、今アメリカが世界統一の最有力候補だと思ふ。いかにも乱暴なやり方をしそうだが、まずアメリカに地平(ぢなら)しをしてもらったらどうか。その為にも今はアメリカの支配下にすっぽりと組み込まれるのが最良の日本の処世術だと思ふ。アメリカの五十一番目の州になることを自ら進んで申し出て、まずはアメリカの世界支配に手を貸そうではありませんか……と。

それで、世界中から戦争がなくなるのであれば、それで大いに結構と井角は考えたのである。

アメリカ合衆国に加盟する条件として、前にも言ったように、奈良県を特別区として自治の権利を認めてもらうこと。そこには皇居を定め、前例通りの天皇制を認めること。また日本は、JAPANではなくNIPPONの表記で統一すること。それらのことを引替え条件としてなら、アメリカ合衆国の五十一番目の州になっても良いと井角は意見を述べた。

しかしそのような条件を付けてアメリカが了承するだろうか？と政

府筋は氣にかけた。それに対して井角は、

「アメリカの立場になってよく考えてみてください。血塗らずして日本が手にはいるのですよ。きっと受け入れれますよ」

井角は自信を持って政府高官に返答した。

日本政府は、井角が提案した内容をそのまま交換条件として、合衆国に加盟の申し入れをした。

おそらくアメリカは、待つてましたとばかり喜んで了承するだろう。井角には先の展開が手に取るように見えた。

結果的にアメリカは、日本を合衆国に組み込むことを了承し、その前提条件としての要望をことごとく認めたのだ。

何故アメリカが日本の要望を悉く呑んでまで、自国の州に加えたのだろうか。

日本は戦前から資源の乏しい国と思われていた。しかし二一世紀を迎えて以降、日本近海には豊富な海底資源が眠っていることが分かって来た。近年の調査では、エネルギー資源として特に有効なメタンハイドレート、金やコバルトなどのレアメタル、レアアースなどが大量に埋蔵されていることがアメリカにも知られていたからである。この貴重な資源は、アメリカとしては是非確保しておきたいものだった。それにこの資源の発掘には高度な技術が必要だった。

日本を属州にしてしまえば、資源とその発掘の技術が労せずして手にはいるのだ。

井角は思う。アメリカは、というよりもワンワールドを企図する勢力は、日本がどのように抵抗しても、いずれ彼等はこの資源を根こそぎ奪い取りに来るだろう。それなら無駄な血を流さないうちに、日本の方から先に彼等の懐に飛び込んだ方が良い。そのような考えからアメリカの

五十一番目の州になるのが良いと政府筋に具申したのだった。もちろんアメリカは日本を自国の州に加えるだろうことを見越しての話だった。

それだけではない。おそらく彼等は、世界中で探している聖櫃が、日本に隠されていると、すでに察知しているのではないか。それなら、尚更どのような条件を付けても、アメリカは日本を州の一つに加えることだろうと、井角は確信していたからである。

正式に合衆国に加盟して、その後日本が、いや、合衆国日本州D Yが盟主となって世界を統治する。その時にはどのように他国があがいても、他の勢力がどの様な手段で対抗しようとも、とても太刀打ち出来ないほど日本D Y (District of Yamato) が名実共に力を備えているはずである。

井角は一人ほくそ笑んだ。

日本は、正式にアメリカ合衆国の五十一番目の州となった。

それまでのいわゆる日本人は、すべてアメリカ人となった。もちろん人種的にはそれまでの日本人と変わりはないが、国籍がアメリカ人となったのである。言うまでもないことだが、あらゆる事がアメリカ合衆国法に制約されることになった。それまでの日本国民と最も大きく違うところは、徴兵制度の義務を負うことである。

それまで気楽に暮らしてきた日本人にとって、徴兵に応じなければならぬというのは大きな覚悟が伴った。しかし考えてみると暮らしている国を護る徴兵制というのは、或いは当然の義務とも言える。

アメリカ国籍となることによって、命の危険が伴う徴兵には応じなければならなくなるが、一方で良いこともあると思われた。それは、国民一人一人が妥協を許されなくなり、良いことは良い、悪いことは悪いとはっきり峻別されることだった。

社会保障制度も今までのような手ぬるい基準では支給してもらえなくなるだろうと思えた。生活保護についても、それまでのような甘い基準では、支払われなくなるだろうと予想できた。

仕事に就かず、したがって社会保険料も払わず、長年にわたって遊び暮らしてきた人間が、生活に困ったからと言ってそう易々と生活支援はしてもらえなくなる。旧日本では、長期間社会保険料を払ってきた給与生活者が受け取る年金額より、困窮者の生活保護費の方が多いというような矛盾がある。おそらくそのようなことはアメリカ国民になれば決して許されないだろうと思われる。つまり、まじめに働いてきた国民には、国はそれだけの最低保障はするが、遊び暮らしてきた者は例外とされるだろうということだ。その点はアメリカの方が、信賞必罰を正確に実行するような気がするのだ。

富士山は「相変わらずいつ噴火を起こしても不思議でない状況が続いていた。各地でも火山活動が活発になり、至るところで小さな噴煙を上げていたが、日本がアメリカに編入されたため、国境線の不法侵入はまったく無くなっているのが、せめてもの救いである。

遷都という意味ではなくなったが、東京から関西方面への政治の主要機関の移転は続けられていた。日本州の州都を東京から奈良へ遷す大事業である。富士山の噴火は決定的と思われ、新たな州都機能の整備が急を要していた。州都奈良はニッポン・ディーワイ (Nippon D.Y.) と呼ばれ、そこには天皇が住まう皇居と、日本州会議場の建設が決定されており、工事は急ピッチで進められている。

七、五十一番目の州

アメリカの五十一番目の州となった日本は、公用語として英語と日本語の二言語が選択された。その定めに従って公文書は英語と日本語が併記されることになったが、その実施は十年後に猶予され、それまでは日本語のままでも可とされた。法的な処置や州政府の文書の整備に時間を要するからである。

日常の言語は、ほとんどの人は日本語を使った。日本の人々は自由に英語を使いこなせないからである。英語は、外国から日本に来て働いている人々の一部が使うだけにとどまっていた。合衆国政府は、日本州政府に命じて英語の普及を推し進めようとし、英語教育は小学校の一年生から教科に組み入れられ必修とされた。公用語として英語も不自由なく使いこなせるようにするためだった。それまでの日本人が「国語」として学んでいた日本語は、第二国語となり、選択科目として残された。大部分の日本人子弟は英語と日本語の両方を学んだ。義務教育としては、英語の教科が増えた分を他の教科の履修時間を減らして調整された。

日本州は、合衆国の方針に準じて難民や移住希望者を受け入れていたので、それまでの日本人に混じって外国人の割合が増えて来ていた。それらの外国人達は、英語よりも日本語を積極的に学び、好んで日本語を話した。そのため合衆国日本州では、日本語を話す人口は全体として増加の傾向にあった。国籍も以前の日本国籍を取得するよりは遥かに簡単だった。

新聞の第一面は英語表記とした新聞社もあったが、大部分の新聞は、従来通り日本語表記のままだった。以前よりの英字新聞はそのまま継続して発行されていた。

通貨は日本円、米ドル両方が通用した。

日本が合衆国に組み込まれても大きな違和感はなかった。第二次大戦後の日本は、その何もかもが米国をモデルにしたものだったので、大きな違いはなかったからである。

強いて違いを挙げれば「天皇制」と「徴兵制」と言えるが、天皇制は日本州に於いてのみ特例的に認められ、皇居は NIPPON DY に鋭意建設中であつた。徴兵制は、国を守る制度としてそれは義務とも言え、特に反対することではなかった。

立法・司法・行政の仕組みも三権分立で変わらず、議会も二院制で大きな違いはない。しかし、旧日本の国会議員が衆議院・参議院の両議員で約七百人いたが、それは州議会議員に格下げして、上下両院で半数以下の三百人に議席を減らさなければならなくなった。その参考にしたのは、日本の面積に近いカリフォルニア州の議員数だった。旧日本の国会議員が多すぎたともいえる。

また、合衆国議会（連邦議会）議員については、日本が合衆国に加盟したことから、元老員で二議席、代議員で十議席定員が増員されることになった。その決定に伴って次回の選挙から、それぞれ出馬できる。

ひかりの会の活動は相変わらず低調だった。会員獲得の活動はせず、入会はもっぱら会員が紹介する人に限定していたからだ。

その頃井角は、会長とは名ばかりの立場を取り、実質の運営は佳与に任せてしまおうとしていた。

運営の主導権が井角から佳与に移行してしばらくすると、佳与が天性の霊能力を発揮して、信者は徐々に増えていた。

でも実際は、最も霊力が高い佳与の娘真秀が、その持てる力を發揮して佳与を補佐していたからだった。

ひかりの会には、直接或いは会員を通じて様々な相談が持ち込まれる。相談希望者はあらかじめ申し込みをして、指定された日に、会長代理の佳与に対面して相談するのだ。

佳与は代理先生と呼ばれていた。本来は会長である井角の代理というような意味であったが、信者からは神様の代理とでもいうほどの意味で呼ばれた。佳与の言葉は天照皇大神の言葉として信者は聞くのだった。

このような信頼を得ていたのは娘の真秀の力だと言っても良い。佳与はむつかしい問題があると必ずと言っていいほど娘の真秀に相談する。そして娘の判断を自分の意見として信者に伝えていたのである。

信者は会長の井角のことを会長先生、会長代理の佳与を代理先生と呼んでいたが、実際に神さまの言葉を伝えるのは佳与の方だったので、信者たちは、本当に偉いのは代理先生だと心得ていた。

佳与は、人当たりが良く、どの様な相談事にも親身になって信者の悩み事を聞く。佳与は人気があり信者に慕われた。だから信者というより、ほとんど佳与のファンとも言う方が当たっているようだった。宝塚の女優のように女性ファンが多いのだが、一方で政治家や事業経営者たちからも大いに頼りにされ、相談に訪れる人達の予約でいつも詰まっていた。

大抵の相談事は、その場で判断して答をくだし、それぞれについて指針を示した。その場で判断しかねるような相談事は、

「その事については、あとで神さまに伺っておきます」と言い、即答せず、真秀から神さまに伺いをたててもらって、その答えを聞いてから、後日に信者に返答するようにしていた。

つまり、神の託宣をするのは真秀で、神の託宣を聞く審神者(さにわ)の役を佳与が受け持ち、神懸かりする本人、つまり神の依代(よりしろ)の役を真秀がやっていたのである。佳与は、信者からの受けた相談事を内

容によって、佳与自身が判断つきかねる場合は真秀に言い、真秀が神に伺いを立てるのだ。

奥座敷の神棚の前で祈ると、真秀の口からは、神の言葉が佳与の問いかけの答えとしてすらすらと出てくるのだった。その神の言葉を信者に取り次ぐのが佳与だった。

そのうち佳与は、和光神社の信者や、ひかりの会の会員から、「神代(しんだい)さん」と、アマテラス神の代弁者のように尊敬されていた。

そのうち、会員の中でもリーダー格の西野、そしてサブリーダーともいえる荒木の両会員が力を発揮し始めた。この二人は独身だったが、母親とも言えるほど年の違う佳与を心から尊敬し、教祖に接するように崇めて仕えていた。

一方その娘の真秀に対しては、二人共いつも遠くから羨望のまなざしを向け、高嶺の花の女神のように恋慕していた。この気持ちが母親の30佳与の方に向かい、一途に尽くす気持ちを倍加させていたのであった。西野はデザイナー、荒木は学習塾講師と、それぞれ仕事を持っていたが、だんだんとひかりの会に傾倒していった。

そのうち二人はどちらが言うともなく、佳与を教主にして「ひかりの会」を教団にしようと考えはじめた。和光神社の祭神・天照皇大神を崇め祭る宗教団体をつくらうというのである。

二人は、佳与のことを「アマテルさん」、真秀のことを「ワカヒメさん」と呼ぼうと決めた。

いざ教団を創るとなると様々な解決しないといけない問題があった。将来の法人格取得のための準備である。まず真っ先に教義を整備しないといけない。信者を教化育成して教義を広め、礼拝の施設を備えて儀式・行事を行う。

実際月一回の勉強会を開催し、年一度総会を催し、春の例祭、秋祭り
と斎行しているので、宗教的活動は継続していると言える。

明確に役員名を発表していなかったが、改めて公表するとなれば当然
のこと井角建、埴生佳与、埴生真秀の三人が役員で、代表役員は現段階
では井角ということになる。

教義と言えば先代の山辺光雲の残した言葉が教義の中心になるが、こ
れは改めて検討し明文化する必要があった。その他ひかりの会・会則や、
会費、年行事も決定公表しなければならなかったし、あらかじめ決めて
おきたい細則もあった。

西野・荒木の二人は、教主の立場となる佳与に相談すると、数日して
返事があった。

「会長もOKしてくれました。二人で準備を進めてください」

会長の井角も賛成してくれたし、私自身も賛成です。以前からそれは
必要だと思っていましたと言うのだった。また、ほとんどあなた達二人
に任そうと思うが、大事なことなので先ず草案を作って見せてほしいと
いうようなことだった。

二人は時々会長代理の佳代に相談しながら、作業に取りかかった。

日本がアメリカ合衆国に加盟して、日本を取り巻く周辺国から侵略さ
れる脅威は、さしあたって無くなっていった。合衆国日本州となった以上、
その国境線を侵すことは合衆国と敵対することになる。大国ロシアや中
国といえども、さすがに軍事大国アメリカと戦火を交えようとは考えは
しない。まして北朝鮮や韓国には、そのような度胸も実力もなかった。

日本の自衛隊は、合衆国の極東軍の主力に組み込まれ、太平洋各地に
展開していた。戦火こそ交えなかったものの、米軍に日本の旧自衛隊が
加わるとその装備と兵力は太平洋周辺各国を圧倒する。

その頃になると核兵器は、有名無実の古典的兵器に成り下がり、

地球環境、生命倫理上からも、実際には使用不可能な兵器だった。

どこの国も、核に替わる新兵器の開発に腐心していた。

時々には、「某国が超兵器を開発したらしい」と言うような噂が流れ
た。

「アメリカに併合された日本は、核を上回る超兵器を開発したそうだ」
と言うような噂もあった。また外にも、

「日本DYは、世界中で昔から探していた聖櫃をすでに発掘したそうだ。
その聖櫃に保管されていた秘密の金属板には、驚くべき技術が記録され
ていることが分かり、その内容を研究して、そのいくつかの技術は実用
段階にある」とも言い、それは合衆国政府にも内密にしているらしいと
の噂も一部に流れていた。

時を経て、世界は大きく様相を変えようとしていた。国々がまとまっ
て大きな勢力圏を築き、ブロック化して連邦を形成していた。

それは、次の五大連邦である。

まずは●アメリカ連邦

これは南北アメリカ大陸・豪州に加えてハワイ、オセアニアの旧諸
国と日本がそれに含まれている。

次には●ヨーロッパ連邦

これは、旧EUと西ロシア。

そして●アジア連邦

これは、旧中国と東ロシア、南北朝鮮と台湾、東南アジア旧諸国。
続いて●中近東連邦

ここは中近東・インド・セイロンである。

そして●アフリカ連邦

ここには勿論アフリカ旧諸国がはいる。

これら五つの連邦圏が一つに統合されると地球国家、世界連邦の誕生となるのである。

八、盟主国ヤマト

合衆国の五十一番目の州になった日本は、周辺諸国からのいやがらせや、領空・領海侵入の脅威は全くなかった。それは、日本を侵そうとする行為は、そのままアメリカへの敵対行為を意味するからである。日本の自衛隊を併合して、以前にも増して圧倒的な軍事力を誇る軍事大国となったアメリカ連邦へ反抗する勢力などあるはずはないと多くの人は思った。

防衛上の心配はなくなったものの、日本は自然からの脅威を抱えたままだった。それは間近に迫って来ていると思える富士山の大噴火である。富士山の周辺では異変が続いていて、今にも大噴火が起こるのではないかと思わせた。

日本州政府は、日本DY内に州会議場と皇居の建設を急いでいた。日本DYは旧日本の奈良県と同じ領域である。その奈良県の、古代に都が置かれた藤原京址に、日本の最も重要な施設を築こうというのである。その他にも州都としてどうしても必要な建築物があった。それを富士山が大噴火を起こすまでに成し終えなければならぬ。噴火をしてからでは遅いのである。

それで州政府は、まず天皇に関西へお遷り戴こうと考えた。皇居は建設を急いでいるが、完成までにはまだ相当の日時が必要だった。

「そうだ、ひとまず京都御所を仮皇居として戴こう」

首相がそのように主張し、州会議でも同意を得て実行に移された。州会議は、旧日本の国会議事堂で行われている。

中国四千年の歴史を見ても分かる通り、支配者層の民族が代わり、皇帝が交代しても、その国の官僚機構はそのまま受け継がれている。国家の統括運営には、その国を統治するための官僚機構はどうしても必要なのである。その例に漏れず合衆国に加盟した日本も官僚は旧体制のまま引き継がれていた。

先の第二次世界大戦後の日本に於いても、それは同様だった。

連合国軍は、占領した日本に占領軍総司令長官としてマッカーサー將軍を送り込んだのだった。乗り込んだきたGHQのマッカーサーは、日本を統治するにあたり、日本の官僚機構をそのまま利用した。その方がスムーズに支配力が行使できるからだだった。それだけでなく、天皇制まで温存して日本人を操縦しようとしたのだと考えられるのである。

そのように考えると、第二次世界大戦後の日本は、実質アメリカに支配され続けてきたと言える。講和条約を締結して独立したかに見えた日本だったが、占領軍としての米軍は日本に駐留し続け、名ばかりの軍隊と言える自衛隊は、おそらく米軍の指揮下に入れられたままだと思える。この自衛隊は今のままではおそらく自国を護るための軍隊としては機能しないと考えられる。

このように軍事だけに限らず、政治においても戦後から今現在に至るまで、日本の一般大衆には知らされないまま官僚機構はそのままに、アメリカの日本支配の手先として利用され続けて来たと考えられる。それがアメリカの、戦後日本の支配構造ではなかったか。

黒船来航後の日本は、日米通商条約締結のあと、ほとんどの国民が気

付かないままアメリカの掌(てのひら)で踊らされ続けてきたのだと言える。民主主義という名目のもとに、立法・司法・行政の国家運営の仕組みもまったくアメリカの機構と同じであった。日本国民は自らの手で選んだと錯覚させられてきた国会議員や、その筆頭たる首相といえども、ほとんど自らの意志は封殺されていたのではなかったか。彼等はその殆どが自分自身も気付かないまま、傀儡人形のように操られてきたと考えられる。

日本を真に支配するアメリカの背後勢力は、戦後から一貫して、日本の官僚機構を利用してきた。そのような状況が戦後から現在まで与党・自民党の政治下で続けられて来たのだった。

しかし、この度の日本は、アメリカの支配下になるのを承知の上で、政治家も国民も賛同して自らその属国として加わったのだった。

今度は自らの意志で支配下に入ったのである。

問題は、合衆国の一員となった今、これから先、日本としてのアイデンティティを残すことができるのかどうか。つまり日本の文化を、どの様に後世に伝えて行けるかである。先ず第一に言語のことがある。

日本は英語と日本語が公用語となった。合衆国政府は英語を第一国語として通用させようと義務教育化を計っている。

日本は自ら進んでアメリカの支配下に入った。ずっぼりと懐に入り、まず、アメリカの世界支配に手を貸そうというのである。アメリカに地ならしをしてもらった後、日本が世界の盟主となって世界を治めることはできないだろうか。そうすれば世界の恒久平和は実現出来るかも知れない。

しかしながら、世界を統治するには名分が必要だった。盟主として世界に認めさせるだけの根拠があるのである。

かのアインシュタイン博士が、残したと伝わる次の言葉……

「この世界の盟主なるものは、武力や金力ではなく、有らゆる国の歴史を抜き越えた、最も古くまた尊い家柄ではなくてはならぬ」これはまさに日本のことを言っているのである。

それに、日本D.Yには世界が認める宝物がある。これは無限大とも言える力を秘めた宝物で、その活用の仕方によっては科学力でも生産力でも、果ては軍事力でさえ、圧倒的に他を凌駕できる可能性を持つものである。それが世界中が昔から探し求めていた「聖櫃ARK」である。

それがあるかぎり世界中が日本D.Yにひれ伏すのは確実と言えるものだった。そして、仮にその保管場所が洩れ知られて、他国に奪われたとしても、そこに記されている秘密は容易に解読される懸念はないのだ。

アメリカ連邦日本州の公用語は、英語と日本語である。連邦政府は英語の普及を促進する政策を採っていたが、日本に住む人々はその殆どが日本語を話した。外地から日本に住み着いた人々も好んで日本語を習得して、日常的に日本語を使用するようになって来ていた。みんなが日本の文化が好きだったのである。

「日本語は美しい」「日本語の歌も素晴らしい」

外国から日本に来た多くの人々はそう言い、日本語の持つ音の響きに魅了されているようであった。

さて、ひかりの会では……

井角建は、ひかりの会を引退して会長職を佳与に託し、隠棲しようと思っていた。

五條市のひかりの会本部で、埴生佳与、真秀(まほ)、会員の西野、荒木を前にしてその話をする。

「私は今年限りで引退しようと思う」と井角は言った。

あとを継ぐ三代目は、埴生佳与会長代行に委ゆだねたい。彼女は会の運営を私以上に立派に成し、見事に発展させてくれるだろう。この三代目会長を補佐するのは真秀さんで、真秀さんが神さまの言葉を話す依代(よりしろ)つまり神主(かむぬし)の役、そしてその神様の言葉を聞いて見きわめ、信者に伝えるのが審神者(さ)にむ役の佳与さんである。佳与さんはひかりの会・三代目の会長であるが、また神様の言葉を伝える代言者でもあると話した。そして、こうも言った。

「引退後、私は当分の間、和光神社の宮司をしたいと思う」と言い、あとはすべて三代目に任せるので、以後一切ひかりの会には口出しはしないつもりだが、最後に私の存念を聞いておいてもらいたいと、次のように語りはじめた。

「はじめに再確認しておきたいのは『ひかりの会』の目的のことだ」と井角は言う。

ひかりの会の目的は、一言で言えば、お隣さんと仲良くすること、広げて言えば、近隣諸国と友好関係を築き、世界に向かってその輪を広げ、世界に恒久平和を表現させることを第一の目的とすると、ひかりの会の目的を強調した。だから勉強会で行っている歴史勉強や霊性向上のための修習は、目的を成就させるための方法論にすぎない。また、会員の増員についても、そのこと自体が目的ではないし、金集めが目的ではないので、新会員の加入は慎重にしてほしいと話す。

「さて、ここで日本と世界のこれからの行く末について私の見方を述べしておく」井角はひとり一人の目を見ながら続けた。

これからの日本はどうなるのか？

これからの世界はどうなるのか？

その中で日本はどうすれば良いのか？

井角は静かに、預言するように語る。

……世界は大きな五つの連邦に分かれて大戦争になるだろう。第三次世界大戦の勃発である。地球規模の大戦争になるが、この戦争だけは避け得ないだろう。この戦争を経て、一つの地球国家が実現する。では、その段階で日本はどのような役割をするのか？

はじめ日本は、アメリカ連邦の主力軍に加わって世界統一を果たすべくアフリカ連邦の征服に向かう。ここは大きな戦闘をするまでもなく配下に下すと次に中近東方面に戦端を展開する。その戦争では、アラブ系民族を中心とする中近東連邦は支配されることを拒み、遂には中国を中心とするアジア連邦と結び、頑強に抵抗する。

一方、旧EUとロシアを中心とするヨーロッパ連邦は、イスラエルを併合してアメリカ連邦に接近しようと図る。

これは大連邦の背後にある国際資本と、ユダヤ・キリスト教系の宗教勢力による画策である。これによって世界の勢力図は、「キリスト教系国家群」対「反キリスト教系国家群」の宗教戦争の様相を呈して来るとだろう。

このような成り行きで、世界は大きく東西に分かれ、地球が二つに割れてしまうのではないか思うほどの、未曾有の世界大戦に突入するだろう。地球という惑星がそのバランスを崩してしまうのではないか思える大戦争の到来である。もちろん、地球の生態系も狂ってしまうかも知れない。……

「この戦争は実に悲惨な戦争となり、人々は真に平和を希求する。戦いに倦み、世界は平和を築く盟主を求め、人々は自然と日本にその役割を期待するようになるだろう」

井角建はここで一息ついた。

「そこに日本の役割がある。世界に戦争がない地上天国を実現させるには、日本のように歴史が古く、神道のように汎神を信奉し、和を尊ぶ文化を持つ国が盟主となって、異文化間の理解を深める仲立ちをすれば、世界の恒久平和実現も夢ではないと思う。世界平和を担う盟主の役割は日本が一番ふさわしい」

井角は更に続ける。

「この第三次世界大戦の後に、真の世界平和が実現するのだが……。言い換えれば、この第三次世界大戦を越えなければ世界平和はやって来ないだろう。ここ迄が私が見た先の日本と世界の展望である」

そう言うと井角は、私は本日以降ひかりの会の活動から一切手を引こうと思うので、皆さんに一番大事な事をお願いしておきたいと次のようなことを言った。

一つ、聖櫃 Ark は現在埋納している場所から掘り出して、誰にも気付かれないような場所に隠し直す事。

一つ、このことは丹生一族の秘密として、必ず一族の長(おさ)となる筋の者に代々口伝する事。

一つ、一族の長は女で継承するのが習いであること。現在の一族の長、姫神子(ひめみこ)は埴生佳与である。次に続く稚姫(わかひめ)は埴生真秀である。

一つ、ひかりの会々長は誰が引き継いでも良いが、和光神社は必ず丹生一族の長に繋がる筋の者が継承すること。

一つ、一族は全て吉野三山を尊崇すること。

「世界平和の実現のために、ひかりの会は相互理解の輪を広げて行く活動を続けてほしい」

井角建はこの言葉を最後として、ひかりの会・会長を退いた。

替わりに三代目会長に就任したのは、もちろん埴生佳与であった。